行幸の御おくり物さうの琴のことぢづゝみにかき
つけさせ給ふ

しるしおく世の古事のおのづから絶えたるをつぐ跡習はなむ

永井信濃守領し來れる蹉跎といふ所の天神の社荒
廢して年久しくなりぬるを修造のいとなみ功を終
りてかの社にこめ奉りたき念願とて御製申請けし
とき〔つかはさる〕

家の風代々につたへて神がきや絶えたるをつぐ梅もにほはむ

いかなる折にか

思ふ事一つかなへばまた二つみつよついつゝむづかしの身や
硯の命は世をもてかぞへしるとかや人の世をさし

「かへまくほしき」一本「かへまほしき」に作る、

もみじかきにかへまくほしきことよ故院つねに御
手ふれし物をとおもへば崩御の後は座右に置きて
朝夕もてならして二十とせあまり七とせになりぬ
今はとて永源寺の住持にゆづりあたへて彼寺の具
となさしむおのづから經陀羅尼〔書寫〕の功をつまば
などか結縁にならざらむや〔は〕とてなむ

海はあれど君が御影のみるめなき硯のみづのあはれはかなさ

我が後はすゞりの箱のふたよまでとり傳へてし形見とも見よ

右は江州永源寺一系和尚へ硯御寄進のとき箱の内に
宸筆にて被遊被遣候

山陰の道の側に世捨人あり白茅を結びて住めるこ

と十年ばかりになりぬかの庵に銘じて桐江といふ
三峽にもかへざる江山を望みては詩情の助となし
一鳥なかざる雪の朝岑寂をあまなひては禪定を修
し已に詩熟し禪熟せりこゝに十篇の金玉をつらね
て投贈せらる幽賞やまず翫味あくことなきあまり
に芳韵をけがしつたなき詞をつゞりてこれにむく
ゆといふ愧赧甚しきものならし
うらやまし思ひ入りけむ山よりもふかき心のおくのしづけさ
いかでその住める尾上の松風に我もうき世のゆめをさまさむ
思へこの身をうけながら法の道にふみもみざらむ人は人かは
うぐひすもところえがほに厭ふらむ心とや鳴くひとく〳〵と
心してあらしもたゝけとぢはてゝものにまぎれぬ蓬生のかど
山ざとの春やへだてぬ雪間そふしばのまがきの草あをくして
ふるさとにかへればかはる色もなし花も見し花山も見しやま
去年よりもことしはしげき雪をもるみ山の杉のしたをれの聲
この國につたへぬこそは恨なれたれあらそはむ法のこゝろを
世にふるはさても思ふに何をかは人に求めて身をばたのまむ
御在位のみぎり仙洞へ竹に雪のふりかゝりたるを
そのまゝ折りながらまゐらせられて
今よりは雪にもてはやす言の葉の御垣の竹のよゝにつもらむ
後陽成院崩御の御時の御歌
九月の末つかたおもひもあへず色にうつろひしは

たゞ夢のうちながらさむべきかたなきかなしさに
佛を念じ侍りけるに諸法實相といふことをおもひ
いでゝそのはじめに置きていさゝか愁吟のおもひ
を述べ侍るならし

しら雲のまがふばかりのかたみにて煙の末もみぬぞかなしき
よそへ見るたぐひもはかな朝顔の花の中にもしをれやすさは
ほしわびぬさらでも秋のつゆけさはなみだしぐるゝ墨の袂に
うつゝある物とはなしの夢の世にさらばさむべき思ともがな
つかふべきあとだにあらばなぐさまむ苔の雫を袖にかけても
さま〳〵にうつりかはるもうき事は常なる物よあはれ世の中
うけつけし身の愚さに何の道もすたれゆくべき我世とぞ思ふ

女御入内の御時將軍家よりの使藤堂和泉守高虎に
橘の折枝につけて下さる

名にしおはゞ花たちばなはそれながら昔ばかりの匂やはある

元和中八月中旬のころ中院大納言通村武家勘當の
事ありて武州にある比つかはさる

思ふより月日へにけり一日だに見ぬは多くの秋にやはあらぬ
秋風にたもとの露もふるさとをしのぶもぢずり亂れてや思ふ
いかにまた秋の夕をながむらむうきはかずそふ旅のやどりに
見る人のこゝろの秋にむさし野もをばすて山の月やすむらむ
何事もみなよくなりぬとばかりをこの秋風にはやもつげこせ

東照宮十三回忌に法華經二十八品人々に歌よせた

まひける巻頭に序品照于東方

いちじるし妙なる法にあふさかの關のあなたを照すひかりは

同じ時につかはさるゝ心經の包紙に

ほとゝぎす鳴くは昔のとばかりや今日の御法を空にとふらし

あづさ弓やしまの浪を治めおきて今はたおなじ世を守るらし

御位ゆづらせ給ふ時

思ふ事なきだに安く背く世にあはれすてゝもをしからぬ身を

後鳥羽院四百年忌御追善に霞を

こひつゝも鳴くや四かへり百千鳥かすみへだてゝとほき昔を

「東照宮三十三回忌をとぶらふうた」といふ文字をめぐりにおきて中に藥師佛の五體をこめてあそばし

見聞隨筆詞書「御落飾の時」第二第三句「なきだに背く世の中に」に作る、

ける

年をへて敬ひませるしめの内にみことのりをば神もうけきや（聞きイ）

やよひ山さきおくれむも恨みじな花を卯月のぬさとたむけむ

うば玉のくらく迷はむ道もいさしらず來ぬらし世をさとる人

とひみばやふけゆくからに蓬生の月にうき世をへだてたる門

賴むべき宿ならなくにこゝにしもきてとふ人をまつがはかなさ

うきてよる山吹さくらこの岸にたゆたふ涙のうつたへに見む

ふりくるもやすくぞすぐる山颪にたゞよふ雲やかつしぐるらし

らくと見るもやがて憂けくの種としれ唯思ふべきは四通佛性

ふる里は八重の白雲へだてしに行きかふ夢を見つるあはれさ

うき霧とやゝながめやるあしのやの藻鹽やくてふこやの煙を

後水尾天皇

せき入れて汲まむもいくよ白菊の下ゆく水にめぐるさかづき

うらにつり島にひくしもなつかしき春にしあかず見し櫻だひ

のこりゐてふるき世にふる淺茅生に雨とふるらし今日の涙は

見し春のつゝじをうつす山水のたゞ松あをきなつになりゆく

鳥もしれやよや淺くは恨みじよこの夜深きをいつかわすれむ

時すぐる山田のおくて仇にしも霜にふりゆくは恥かしの身や

右の十六首は「とうせうのみやさむしうさむくはいきをとふらふうた」の二十四文字を四首の歌によみ入れて方形に書きその中に竪に五首横に五首斜に二首をよみそへて竪の五首におの〳〵「やくしふつ」の五文字をよみ入れ給ひて宸筆にあそばされたるなり

一本詞書「將軍家光公薨去の時女院御方へつかはさるゝに作る、

大猷院殿御他界の悼五首　女院の御所へまゐらせらる

あかなくにまだき卯月のはつかにも雲隱れにし影をしぞ思ふ

時鳥やどに通ふもかひなくてあはれなき人のことづてもなし

いとゞしく世はかきくれぬ五月闇ふるや涙のあめにまさりて

たのもしな猶後の世は目の前に見ることわりを人におもへば

たゞたのめかげいやたかく若竹の世々の緑はいろもかはらじ

後光明院崩御の時

をり〳〵を思ひいづれば草も木も見るに涙のたねならぬかは

萬治三年のころ女院御茶屋つくらせ給ふに御幸なりていへづくりたぐひなし」といふことを沓冠にす

ゑ給ひて

いくよをへ月もすむべくりちの歌くりかへし歌ひ猶かけもなし

同じとき沓冠の御歌　このちややたぐひなし

ことさらの千代のはじめや大和歌くりかへし歌ひ猶仰ぐらし

右一首は御茶屋を板倉周防守建てしに御色紙被下候

寛文十二年十二月女院御所の庭に高さ三丈ばかりに雪にて富士山のかたをつくらせ松うゑさせなどして御覽ず法皇御幸なりてよませ給ひける

花鳥の色音もなにかおいが身はゆきよりほかの友ならばこそ

寛文十三年五月九日禁裏院中殘りなく町屋に至るまでおびたゞしく燒失し侍る比

ありとある事はさながら内も外も世の常ならぬ世の常をこそ

延寶二年七十九の御寢覺に

おもひやれいるがごとくも梓弓やそぢちかづく老のねざめを

延寶三年八十の御賀の御歌

この春にせめておどろく身ともがなはぢおほしてふ命長さを

同年霜月八十の御賀に主上より銀の御杖をまゐらせ給ふとて「君が手にけふとる竹の千世の坂こえてうれしきゆくすゑも見む」とよませ給ひけるに御かへし

つくからに千年の坂もふみわけて君が越ゆべき道しるべせむ

東福門院崩御の時

あまも又たがうき身ぞと世をしらば思ひ暮せる日こそつらけれ

同じとき彌陀の六字を句のうへにおきてあそばしける

なにごとも夢の外なる世はなしと思ひし事もかきまぎれつゝ
むかひゐてたゞさながらの面影に一言をだにかはさぬぞうき
明暮にありしながらのことわざも目の前さらに見る心地して
みぬ世まで思ひ殘さずとばかりもこの一ことを何にかふべき
誰に思ひ聞きても見ても驚かぬ世をばいつまでの空頼みして
ふたゝびはめぐりあはむも頼まれずこの世を夢の契かなしも

八十四の御年に

それをだに人に見えむもつゝましきやそぢの後のしき島の歌

延寶八庚申年五月八日將軍家綱公御他界の時

世のあはれ知るかとぞおもふ時鳥おのが五月の空に鳴く音は

五典の御歌

君臣有義

天つ空くもりなきまで照る月のうつれる水のいろもにごらず

父子有親

雲居より澤邊におよぶ聲すなり子を思ふ鶴もおもはるゝかな

夫婦有別

ゆきかよふ山田もる男ぞ暇なきしづはた帶のとけし夜のまも

長幼有序

春ごとに梅よりつぎて咲く花の木末あまたのをりふしぞなき

朋友有信

蘆間より友したふ聲の哀なるおのれのみやはあさるかりがね

八景の御歌

粟津晴嵐

雲はらふあらしにつれてもゝ舟も千舟も波もあはづにぞよる

勢多夕照

露しぐれもる山とほく過ぎ來つゝ夕日のわたる勢多のなが橋

矢橋歸帆

眞帆ひきて矢橋にかへる舟はいま打出の濱のあとのおひかぜ

三井晩鐘

思ふそのあかつきちかきはじめぞとまづ聞く三井の入相の鐘

唐崎夜雨

夜の雨におとをゆづりて春風をよそになたてそからさきの松

比良暮雪

雪はるゝ比良のたかねの夕ぐれに花のさかりを過ぐる春かぜ

石山秋月

石山やにほの海てる月かげはあかしも須磨もほかならぬかな

堅田落鴈

峰あまた越えてこしぢにまづ近き堅田になびきおつる鴈がね

十首御製

早春霞

雪げにもくもりなれぬる空ながら春のかすみの色ぞまがはぬ

靜見花

ことしげき世をも忘れてつくづくと心をわけぬ花にむかひて

野子規

聞きとめてあかぬ野中のほとゝぎす見おくる程ぞ空に久しき

海邊月

須磨あかしそむらむ影もみるめかなわが身を浦の波の上の月

仙洞御製集第四句「うき身を浦の」に作る、

山紅葉

わけ入れば麓にも似ずもみぢ葉の深きやふかき山路なるらむ

關路雪

しら雪のいづこか家路ふる雪にすゝまぬ駒のあしがらのせき

忍待戀

忍ぶればうれしき物の小夜ふけて人はねたるぞ待つに苦しき

仙洞御製集第一句「忍ぶれど」に作る、

稀逢戀

つひに身の契なれとやたとへても浮木の龜の逢ふせばかりを

社頭祝

石清水ながれの末のわがすゑも神しまもらば世々に絶えせじ

慶安元年九月十三夜十三首和歌

此十三首和歌原本一首不足、

九月十三夜

名にしおふ今宵一夜にとばかりも見る長月のかげをしぞ思ふ

月前星

知らず誰星をかざしに月をおひてこゝもはこやの山をとふらむ

月前時雨

しばし猶くもると見しぞひかりなる時雨の雲にもるゝ月かげ

仙洞御製集第二句「くもると見しは」に作る、

月前荻

かゝる夜の月に夢見る人はうしいはぬばかりの荻のおとかな

一本第三句「人はうしと」に作る、

月前鹿

つまごひをなぐさめかねて姨捨の山ならぬ月に鹿や鳴くらむ

花洛月

春によせしこゝろの花のみやこ人うつろふ秋の月や見るらし

古寺月

古寺のきくも紅葉も折りちらしくむあかつきの影ぞ身にしむ

寄月忍戀

うちとけて見えむはいかゞくまもなき月に心の奥もしるらむ

寄月變戀

もろともに見し夜の月の光までおもがはりする人の秋は恨みじ

寄月別戀

人もかくおくらましかばかへるさの月は身にそふ今朝の別を

寄月述懐

世をなげくなみだがちなる袂には曇るばかりの月もかなしき

寄月旅泊

こぎいだすあすの波路もことゝとへよこよひの月はみつの泊を

寄月祝言

みちぬべき月に思ふも行く末をまつこそつきぬ樂しみにして

神祇部

神祇

後水尾天皇

たのむぞよみもすそ川のすゑの世のかずには我ももれぬ惠を
まもれなほ世にすみよしの神ならばこの敷島の道のまことを

社頭イ
神社

見ても思ふすなほなるしもかげ高き内外の宮のかやが軒端を
〔うつしてもみばや宮居もあらたむる賀茂の川霧古きためしも〕

一本に據て補ふ、

伊勢

うごきなき下津岩根の宮柱身をたつる代々のためしならずや
長月やながきためしのみてぐらのつかひは絶えじ神の御前に
〔にごりなき心の道をたてそめし五十鈴の河のみやばしらかも〕

仙洞御製集第四句「身をたつる代の」に作る、

一本に據て補ふ、

社頭祝

世々かけてたのむ北野の一夜松ひとつふたつの道のためかは
わがたのむ心のそこも石清水おなじたぐひとまもらましかば
〔一夜松十かへりの花も百千たびなほ咲きそはむ宮居ひさしき〕

五首一本に據て補ふ、

寄花神祇

あかずとや神もうくらむ色も香もふかきこゝろの花の手向を

寄月神祇

月讀の神のめぐみのつゆしげきこよひの秋ぞ（はイ）ひかりことなる
八百萬神もさこそはまもるらめ照る日のもとの國つみやこを

釋教部

在於閑庭

しづかなるみ山の松のあらしこそ心につもるちりもはらはめ
〔おのづから月もくもらじ靜なるこの山みづのすめるこゝろに〕

一本に據て補ふ、

無諸衰患

あふげなほやしまの外も涙風のうれへなしてふ法のまことを

三首一本に據て補ふ、

〔たのもしなあまねき露の惠には花もおとろへず蝶もうれへず〕

〔啐啄同時眼〕

〔さやけしなかひこを出づる鳥が音にやぶしもわかず明くる光は〕

〔啐啄同時用〕

〔立居なくかひこの鳥のつばさこそ山もさはらず海もへだてね〕

宮門極樂

むなしきか色なき色は誰か見むよし見む人も見ぬ世ならずば

秋霧のたちもおよばぬおほぞらのくまなき月は見る人もなし

未顯眞實

妙なれやつひによそぢの霜の後世にあらはるゝ松のことの葉

一本に據て補ふ、

〔十といひて四方の山邊の春にだに見ざりし法の花ぞひらくる〕

拈花微笑　世尊拈花迦葉微笑

ゑみのまゆひらけし花は梅か桃か誰しりしらむ誰しらずとも

心もてひらくる花はうめか桃かとはゞや人によしいはずとも

德山入門則捧

淡路明石がたせとこす舟をうつ涙にいはほも山ものこるものかは

應無所住而性己身

ぬしや誰とへどこたへぬ蜑の子のとまりさだめぬ涙の上かな

無覺無性

おのづから思ふはものを思ふかは思はじこそはうき思ひなれ

如是我聞

わが聞きし人のこゝろを種として世々にや法の花は咲くらむ

釋教

ふかく入るもあさしとをしれ法の道山のおくなる麓ならずば

仙洞御製集第五句「麓なら では」に作る、

耳に聞き目に見ることの一つだに法の外なるものやなからむ

春釋教

照しみよ春日にきえぬ霜もあらじ野べの若菜の罪はありとも

霜なながら消えも殘らじ春日さす野邊の若菜のつみはありとも

一本に據て補ふ、

僧問趙州如何是祖師西來意、州云庭前柏樹子

染めなさばこゝろや西より來る秋の色はいろなき庭のこずゑを

〔高亭隔江見德山便曰不審、德山擧扇招高亭忽然大悟〕

〔風きよし山つらなりて水とほき入江のなみのしろきあふぎは〕

無常

あはれなり鳥部の山の夕けぶりわれさへ風におくれさきだつ

あはれなり鳥部の山の夕けぶりわれもたきゞの身を忘れつゝ

寄舟無常

世の中の涙のさわぎもいつまでの身の浮舟はさもあらばあれ

あるはなくなきは涙間にきえうせて漕ぎゆく舟や人の世の中

一本題「僧問趙州狗子還有佛性也無州云無」に作る、

坊城俊定卿みまかりしとき趙州無のこゝろを

かくれがのいづくかはあるゑのこ草それはと問へば山梨の花

泉涌寺の御影にあそばしつけらる　御ぐしは堯恕法親王外は探幽書也

時ありて春しりそむる一花よ見よひとはなも咲きのこるかは

後水尾天皇

見聞隨筆第一句「身はかくて」第五句「とどめかねつゝ」に作る、

身をかへて又も來ぬ世に水莖の跡だにしばしとゞめむもうし

御影の御自詠　般若院に在り御ぐしは妙門院様被遊外は探幽書入之

うしや　のみ山がくれの朽木垣さてもこゝろの花しにほはゞ

靈源寺御影　奈良御一門様被遊

見聞隨筆第二句「思へばかなし」下句「見えし高嶺も花の白雲」に作る、

おもへたゞ應化の外もなすことのあらばまことの佛ならじを

御辭世

ゆきゝて思ふもかなし末とほくこえしたかねの峰のしら雲

祝部

祝言

仙洞御製集第一句「敷島の」に作る、

今こそと袋にはせめあづさゆみ八つのえびすも皆なびき來ぬ

敷島やこの言の葉になにごとかまさきのかづら長きためしは

守るてふいつゝの常の道しあれば六十あまりの國もうごかず

たえせじなその神代より人の世にうけてたゞしき敷島のみち

一本に據て補ふ、

〔をさめしる人の心よとざしせぬ民よりもなほうれしとや思ふ〕

寄日祝

天つ日を見るがごとくに惠ある世とだにしらぬ時のかしこさ

つきせじな天津日嗣もくもりなく出で入る影の照すかぎりは

寄月祝

月讀のひかりあまねくてらすてふ國も千五百の秋はつきせじ

寄國祝

ためしなやよその國にもわが國の神のさづけしたえぬ日嗣は

一本に據て補ふ、

〔たがへすをはぶく春にぞあらはるゝ民安國のもとつこゝろは〕

寄世祝

祈りおく千年は代々につきもせじありとある人のひとつ心に

一本に據て補ふ、〔世をば今たれおろかにも祈りおかむ惠の露のかゝらぬもなし〕

寄道祝

九重の名は絶えずなる木の道のたくみも代々のあとを殘して

行く人のみな出でぬべき道ひろく今はをさまる國のかしこさ

寄道慶賀

仙洞御製集第一句「思ふこと」に作る、思ふことの道々あらむ世の人のなべてたのしむ時のうれしさ

行く人の遠しとはせじ東路のみちのはてまでをさまれる世は

寄社祝

九重のためならぬかはまもれたゞ天つやしろも國つやしろも

二首一本に據て補ふ、〔まもるより代々にたゞしき風もあれや北野の松の言の葉の道〕

〔寄松祝〕

〔散りうせぬためしと聞けばふるき世に歸るを松の言の葉の道〕

〔寄若菜祝言〕

若菜つむ袖のよそめに白妙のつるの毛ごろも千代は見えけり

寄菊祝言

もゝしきや世々のむかしにかへる世をとりそへてくめ菊の盃

一本に據て補ふ、〔くみそへてめぐらむ御代は長月のけふ九重のきくのさかづき〕

寄龜祝

こゝのへにうつせる龜の山かげにしらぬ千年の後までも見む

一本に據て補ふ、〔おもへたゞ誰もかくしてむつまじき世のほかにへむ龜の齡を〕

寄鏡祝

開き見る文にぞしるきをさまれる御代のかたみや世々の古事

爲君祈世

千世もしるしみかきの竹のふして思ひおきて數ふる人の誠に

〔やすかれと萬の民をおもふまで代々の日嗣をいのるほかかは〕

二首一本に據て補ふ、

〔こゝのへの君をたゞさむ道ならで我身ひとつの世をば祈らず〕

〔以上後水尾院御集〕

後西院天皇

寛文十三年正月廿三日和歌御會始

興遊未央

つきせじなうたふ青柳さくら人をり〳〵ごとのあかぬまどゐは

延寶二年正月廿七日和歌御會始

青柳風靜

春風になびくすがたや見れどあかぬ柳の絲もなが〳〵し日も

同三年正月廿三日和歌御會始

心靜延壽

千代もへむものにまぎれぬ心をぞ老いず死なずの藥にはして

同四年正月廿三日和歌御會始

伴松榮久

ひとしほの色もこそ添へ今年より千代松かげの宿のときはに

同五年正月廿三日和歌御會始

飛瀧音清

とけてゆく雪や氷は春のこゑ落つるたぎちのひゞきそへけむ

同六年正月廿二日和歌御會始

柳絲隨風

なびくなり風のみどりも世の春に柳のいと〻いろを添へつゝ

同八年二月十三日

筆寫人心

春きても花さく夢は見ずもあらずうつすぞあさき水莖のあと

同年十月六日御當座

橋落葉

さそひきてもみぢをしけばこれもまた風のかけたる山川の橋

同年十一月七日御當座

冬天象

ありあけの月を見しまのしろたへは雪の底なる朝ぼらけかな

夏植物

人のよのまなぶる道にならへかし竹の子とみる日は幾日かは

天和二年十二月十七日御月次和歌御會

海邊雪

つもる島つもらぬ波もひとつにて白きを見れば雪のあけぼの

鶴馴砌

むれてゐる田鶴はうつし繪かくこそと砌になれて遊ぶけしきや

同日御當座

初雪

つもりてのいつはありとも又や見むしばしな消えそ朝の初雪

濱雪

からす貝それもうもれて雪に今いとゞしらゝの濱ぞ名にあふ

同三年正月廿八日和歌御會始

泉響滴春氷

何か世の春にうちとけぬものやある結ぼゝれたる水も聲して

同年二月廿七日御月次和歌御會

夜思梅

夢ならばなか〳〵花の色も見むやみのうつゝの夜半の梅が香

待久戀

あしたづの音に鳴く心おもひやれ待つほどひさになりし恨に

同日御當座

遠山霞

すみがきのえもいひしらずたゝみなすとほ山うすくかすむ曙

同三月廿一日和歌御會

欵冬露

山吹はいまぞこがねの玉のえだ折るなこぼすな露のさかりを

朝海路

漕ぎはなれこの世の外のこゝちかな波わけいづる朝日影にも

同日御當座

初花

見そめつるこの初花よ後にまたいかにさくらの色香そふとも

關花

しるしらずゆき逢坂の關路とは花の木蔭の名にこそありけれ

江花

花をのみおもひ入江にしづこゝろ難波の春は身をつくしつゝ

〔以上延寶天和中新院御會始並月次御會〕

延寶三年後水尾院八十の御賀の時

この春の八十路を千代のはじめにて命ながさぞ限りしられぬ

〔以上後水尾院御集〕

歴代御製集巻十八終

歴代御製集巻十九

靈元天皇 一

春

歳中立春

春とともに立つや霞もしろたへの雪のふるとし猶ぞへだてぬ

のどけしな程なき年の日數をも今日立つ春にかぞへそへつゝ

暮れのこる日數もそひてあら玉の年のをながき春や立つらむ

年〇うちは松の雪をや花と見む今日より千世の春も來にけり

あら玉の年のこなたにかすみけり春たちこゆるあふさかの山

年のうちは雪も消えあへぬ山の端に霞をいそぐ春や立つらむ

あら玉の年まちあへず年のうちにまづ千代ちぎる今日の初春
年のうちに日數をかけて末遠くかぞへはじむる春は來にけり

桃葉御集第一句「年のうちの」に作る、

歳暮立春

年の内は殘る程なき日數をも待ちあへぬ春やまだき立つらむ
今日はまづ名にのみ立ちてあらたまの年の光を春や待つらむ

桃葉御集第一句「年の内に」に作る、

立春

うす氷うち出でゝ今朝は春きぬと岩間の水もいふばかりなる
立ちそむる霞の袖のうらゝかに春を見せたるあさづく日かな
さえくれし年は夜のまにあらたまの春立つらしもかすむ朝風
鳥が鳴くあかつきかけてくる春の道はあづまの關もさはらじ
天地の人にへだてぬこゝろをも今日あらたまの春に見すらむ

桃葉御集第五句「春に見すらし」に作る、

をとこ山いくよの霞いろそへてさかゆく春にたちかへるらむ
そのかみの光かはらで出づる日の長閑にてらす春は來にけり
朝づく日かはらぬ影もあらたまのひかり加はる春は來にけり
春のくる道をしるべに一年のとほき日かずも立ちかへるらむ
のどけさを幾代のまゝに水無瀬山山のかひある春もきぬらむ
この道の光もそひてのどけさを世にしきしまの春は來にけり

桃葉御集第四句「さかゆく春の」に作る、

立春日

日吉のやはらぐ光おのが名のそらにもかすむ春は來にけり

桃葉御集第三句「おなじ名の」第四句「そらにもかさむ」に作る、

立春風

こほりとく池のみぎはの朝風の吹くかた見えて春や立つらむ
春きぬと今日ふきかへて難波津に咲く花いそぐ風ののどけさ

桃葉御集第二句「今朝ふきかへて」に作る、

今日しこそ春はきぶねの山かぜに玉ちる涙のおとものどけき
さほひめの袂ゆたかに吹きそめて四方に春立つ風ののどけさ

立春霞

末とほく今日よりかすむ沖つ浪やそしまかけて春や立つらむ

立春曉

明くる夜の空より見えて立ちかへる年の光ぞよもにのどけき
一夜をも年はへだてぬあかつきの鳥のはつねに春は來にけり

曉立春

一年のあくる夜いそぐ鳥が音やまだきに鳴きて春をつぐらむ
明くる夜を鳥が鳴く音におどろけば東路とほく春は來にけり
一年のあくる鳥が音のどかにてまだ夜のほどに春は來にけり

立春朝

朝もよひ昨日の去年のはげしさもあらたまるよの春や立つらむ
色づくはさらに春たつ朝もよひきのふの空もことしながらに

桃葉御集第一句「色わくは」に作る、

關立春

明けそむる岩戸の關をはじめにてあづまの山も春は越ゆらむ

立春水

こほりゐし岩根うちとけ瀧のいとのくる春見する庭のいけ水

都立春

名にしおふことばの花の都より色香をよものはるや立つらむ
待ち出でむこずゑの花も名にしおふ都にいそぐ春は來にけり

桃葉御集第四句「色香もよものはるや」に作る、
桃葉御集第二句「言葉の花も」に作る、

元日

一とせも八聲にあけて庭鳥のおのが名だゝる今日ののどけさ

元日宴

ものゝ音も今日をりにあふ春の庭の名に聞きはやせ雲の上人

春風春水一時來

桃葉御集第四句「今日ふきそめつ」に作る、

うすごほり流るゝ水にあと見えて今朝ふきそめつ春のはつ風

雪中春來

木々の雪もそれかと見るに寒からでけふ初花の春は來にけり

くるあとはさしても見えぬ野邊にけさ千里の春を埋む雪かな

「從」字桃葉御集に據て補ふ、

春色(從)東到

春はとくこえぬと見せて出づる日をみちびく方に霞む山かも

のどけしな出づる日影をしるべにてそなたより吹く春の初風

貴賤迎春

のどけさは玉のみぎりも蓬生もへだてぬはるに雪やけぬらし

野澤始迎春

桃葉御集第一句「春の水の」に作る、

春の水澤邊にみつるときつかぜ野なる草木に吹くものどけし

春たちぬらし

敷島ややまともろ人まちえたる春たちぬらし今日ののどけさ

年もこえぬる

きのふまで春はとなりとへだてこし中垣よりや年もこえぬる

桃葉御集第一句「四の時の」に作る、

四の時ゆきてはかへる朝もよひきのふをこぞと年もこえぬる

よもに立つおなじ霞のしるべにや山といふ山を年もこえぬる

初春

靈元天皇

吹きかへてのどかになりぬ志賀の浦や波にも花の春のはつ風

あかずとやいや年のはに水無瀬山かはらぬ世々のはるの霞を

水無瀬川こほりを出でゝゆく波もありとやかすむ春の山もと

花鳥もまだきにいそげ佐保姫のこゝろにまかす春は来にけり

春きてもまだ雪さむきよしの山花やおそきとまづかすむらむ

野も山も春はわくとやふる年の雪もけなくにかすみそむらむ

峯たかみふりさけ見れば春の日の光のどかにかすみそめつゝ

住の江の春をむかふる今よりや花をもまつの千世のことのは

松杉のまだみどりなる雪ぎえに平野のもりやはるを見すらむ

神垣に春はひかりもこもるとやかすまぬさきの山ののどけさ

貴船山雪もけなくに春見せてやはらぐひかりまづかすみつゝ

桃葉御集第五句「春の光を」に作る、

桃葉御集第二句「春の光は」第五句「山ものどけき」に作る、

今日もまたたむくる神もあらたまの年のみとせの初春にして

猶のこる雪げのなごりよもに今朝はるればかすむ初春のそら

桃葉御集第一句「今日はまた」に作る、

桃葉御集第三句「いそがれむ」に作る、

初春風

霜雪のおなじこずゑに吹くもさぞ花をこゝろの春のはつかぜ

みな人のことばの花もいそがなむのどかなる世の春のはつ風

冬がれのやなぎさくらに吹きそめてこのめやいそぐ春の初風

のどかにも吹きなす今朝やさほ姫の袖よりおくる春のはつ風

春のくるそなたにちかき山かぜや都をかけて吹くものどけき

桃葉御集第五句「霞ながらに」に作る、

初春霞

のどけさや四方にみつらむいづこともはるの光はわかぬ霞に

立ちそめて春をぞ見する佐保姫の衣手うすきかすみながらも

桃葉御集第一句「霞の袖に」に作る、

まづ立てるかすみのそでよ春はまだ初花ぞめもとほき山邊に
春の色のはつしほなれやいやましに天つそらにもみてる霞は
やはらぐる光や春にかすが山ゆきもさながらかすみそめつゝ
春の色をふりさけ今ぞみかさ山たてるは淺き今朝のかすみも
春の色のみどりもうかぶ水鳥の加茂の河邊やかすみそむらむ
春といへば幾日もまたでのどけさを急ぐや霞（霞やイ）まだき立つらむ
春もなほまだき日數のそらめかとまがふばかりに立つ霞かな
をりはへて春たつ杣の朝がすみゆたけき袖や世におほふらむ

桃葉御集第五句「世にはふらむ」に作る、

初春雪

くる春のみちのしるべか雪の庭かずそふ沓のあとのむらぎえ
立ちそめし昨日のかすみ色かへて雪げにくもる今朝の春かな

春あさき霞はそらにうづもれてまたふり出づるけさの雪かな
ふりそふはたまらぬ春のみぎりにも凍れるこぞの雪ぞ殘れる
春といへど日をへぬ今朝はこぞの雪の殘るが上に積るをや見む

桃葉御集第三句「今朝よりぞ」第五句「心なもしる」に作る、

初春山

かすみ立つ山をたのしむ今朝よりは春のどかなる心をぞしる
雪きゆる山はたかきもいやしきもみな春にあふ色ぞのどけき
をとこ山さかゆく春のはじめとはのどかなる世の光にぞ見る
峰たかき霞のみどりいくか經てわかくさやまの春になほ見む
長閑なる春をみやこの日かげ山あふげば高くかすみそめつゝ
のどけしな南の山のことぶきをみかさの松によばふはるかぜ
千世こむる春のはじめといはみのやたかつの山にかすむ神垣

桃葉御集第三句「いくよへて」に作る、

初春海

年こえてまだいくほども波のまにかすむ海邊の春のはつしほ

都初春

雪きえぬ深山やいづくかすみたつみやこの春の長閑なる日に

うち日さす都はわきてのどかなる春にちまたの雪ものこらず

うち日さす都の今朝の初春やややがてなべての四方にのどけき

大比枝のふもとかすめる今日よりや都のやまの春は見ゆらむ

初春水

石清水にごりなき世の春見せて千とせを松のかげものどけし

桃葉御集第一句「木がくれも」第四句「山の下水」に作る、

木がくれて春ぞくまなき稲荷山やました水もこほりながれて

初春氷

千世のかげこれも見るべきかゞみとは池の氷にむかふはつ春

桃葉御集第二句「春にふきなす」に作る、

なべて世を春にふくなる神かぜの五十鈴河上こほりとくらし

こほりゐし水また水のこゝろもや春に吹きとくよもの春かぜ

初春松

春にあふ世ののどけさをよろこびの聲ある松の風や告ぐらむ

いつとしもわかぬ色かはわかみどり立つ春見する岡のべの松

今日にあけて色まさりけり神がきの松は一夜の春を知るらむ

住吉やおなじみるめもあらたまの春のうみべの松のひとしほ

初春待花

梅の花はや咲きにほへもゝしきや風ものどけき春のかざしに

初春梅

あめがしたみな春風のはつ花をこのかみがきにほふ梅が香

初春鶯

今朝のあさけ春しりそめてうぐひすの囀る聲の色ものどけき

桃葉御集第五句「匂ふ梅かも」に作る、

春つげて今朝うぐひすの我はとや思ひあがれる初音なくらむ

桃葉御集第五句「初音なるらむ」に作る、

うぐひすも春に心やあらたまのとしの初音をのどかにぞ鳴く

桃葉御集第四句「年の初音も」に作る、

初春〔見鶴〕

こほりとく池のかゞみにすむ鶴の千年の影も見えてのどけき

「見鶴」三字桃葉御集に據て補ふ、

初春衣

春のきる名をさへ空にたどるまで立ちあへぬ今朝の薄き衣手

初春祝道

天がしたいつも八雲の道しあれば神代のまゝの春にあふらむ

早春

立ちそむる春のかすみは花鳥の色音にもまづよそふべきかは

出づる日のそらにぞしるき山の端の霞をいそぐ春のひかりは

はるかにもかすみそめけり住吉や神代の春のおきつしらなみ

住の江やかすめる波のあさなぎに松よりおくる春のはつかぜ

和歌の浦に今ひとしほを松の葉の色まさるてふ春は來にけり

いく千世ぞ春たつ波の玉つしま神代のまゝにかすむひかりは

桃葉御集第五句「けふは見すらし」に作る、

ふるとしの雪も一夜の松のうへに花さく春をけふは見すらむ

出づる日のめぐる方なるいなり山まづ春見えて雪もけぬらむ

雪きえてみどりにかへる松の尾の山も時しるはるのはつしほ

神がきのあたりかすめるのどけさや平野の松の千世のはつ春

あらたまのうべも年とはいつしかに春めく程の日數をぞ思ふ
世はなべてのどかなれとや春にとくやはらぐ光神もそふらむ
この神のひかり加はる春にあひて誰もことばの花や待たなむ

桃葉御集第五句「花を待たなむ」に作る、

早春風

長閑なるこゝろの色に吹きなすややなぎさくらのこのめ春風
吹くあとも見えてのどけし霜雪のえだにこもれるこのめ春風
大比枝や雪よりおろす山かぜもみやこの春に今朝かすむなり

桃葉御集第一句「のどけきは」に作る、

のどけさは花うぐひすのしるべぞと待ちえてあかぬ春の初風
池水のこほりも雪もとけそめて吹くあとしるき春のはつかぜ
花と見む入江のなみのたまつしま春たつ風の吹くにまかせて

桃葉御集第四句「春たつ風も」に作る、

としなみに今朝たちそふやわたつみのかざしの花の春の初風
たまつしまとしたちかへる江の波の花にさくなり春のはつ風
松風のこゑぞやはらぐやはた山うごきなき世の春もしられて

桃葉御集第二句「としなみかへる」に作る、

吹きそめて花もみどりも冬がれの枝にやいそぐ木のめはる風
のどけさの世にあまねきやをさめしる人のこゝろの春の初風
いなり山雪をのこさぬ風のいろはあをばの杉ぞ春や見すらむ

桃葉御集第三第四句「風の色のおとはの杉も」に作る、

早春雲

嶺の雪はまだ春さむし朝日かげにほへる雲をかすみとも見む
かすみかは雲の衣もはるきてはゆきげわするゝ色にのどけし

桃葉御集第五句「色にのどけき」に作る、

うちなびき立つ春見えて神路山雲のしらゆふいろものどけし

早春霞

山の端に靡きそめたる春の色のかすみやゝかて空にめづらし

桃葉御集第三句「春の色」に作る、

立ちかへる霞やいくよ水無瀬山ほらのむかしの春をへだてじ
海山のいづくかもれむ朝日かげそらよりかすむ春のひかりに
なべて世の春とは今朝ぞ峰つゞきいづくの山も霞むひかりに
たちなれぬ朝けばかりの霞にもまづこのごろの春は見えけり
雪げなく晴れぬる空のうすみどりまがふかすみにむかふ初春
山の端に見し消えがての雪の色も春にけたれてかすむこの比
春になるうらゝかげさを見る空に幾日もあらでかすみそめぬる
をとこ山さかゆく春をいまよりも南にとほくまづかすむらむ

桃葉御集第三句「今よりと」に作る、

早春雪

さえかへり降るをもめでゝ松に見る雪は千とせの春のはつ花
ふるがうちもつもらず消えてあら玉の春をうづまぬ庭の淡雪

早春朝

初春の宮居のどけき朝がすみこの八重がきや千代をこむらし

早春山

春の日の名におふ山はわきてまづ南にめぐるかげやのどけき
千世よばふ聲もそひてやのどかなる初春かぜのまつのをの山
長閑なる日吉のみかげ春見えて山もかなたにかすみそめつゝ
朝ごとの日かげにむかふあたご山かすまぬさきに峰ぞ春めく

桃葉御集第五句「峰は春めく」に作る、

山早春

時しらぬ雪はなかぞら不二のねもかすむ麓やはるを見すらむ
神山やみやこの北ものどかにてまもる世しるき春を見すらし
朝な〳〵かすむそなたの日影にも春のこえける山は見ゆらむ

桃葉御集第五句「春を見すらむ」に作る、

わきてとく雪もけぬべし名にしおふ山は世に似ぬ春の日影に
佐保姫のよそほひなせる山まゆや春わく色に今朝にほふらむ

都早春

のどかなる光もそひて玉しきのみやこも日かげ春やわくらむ
すべらぎのみやこの春はまづ見えて袖をつらぬる世々の諸人

桃葉御集第四句「都の日かげ」に作る、

關早春

ゆく年のとまらぬ關路うちかすみこえぬる春にあふさかの山

關路早春

夜のほどに春やこえぬと明けそむる關の外山のまづ霞むらむ
鳥がなく聲のどかなり夜をこめて春やあづまの關路こゆらむ

早春水

ゆく水も春をしらする音羽川としなみはやく立ちかへりつゝ

早春氷

池の面はなかばを今朝のみぎはにて氷によする春のさゞなみ
初春のみぎはの池のなかばにて殘るこほりによするさゞなみ

桃葉御集脱「早春水」に作る、

早春川

いつしかも雪げの水をせき入れてまさる音羽のはるの河なみ

河早春

山ふかき貴船のおくも春ぞとやゆきげを添へてたぎる河なみ
おく山のかすみをわくるきぶね川はやくや水の春を見すらし

桃葉御集第五句「春も見すらむ」に作る、

早春海

筥崎やとほき海邊のかすみにもひかりやはらぐ春や見すらむ

早春浦

春きぬと霞もいまは田子の浦の波にたぐひてたゝぬ日ぞなき

春はまだあさかの浦にほす網の目にたちそめてかすむ波かな

浦早春

神代よりいく春かぜの浦なれて吹きそめつらしすみよしの松

桃葉御集第三句「浦なれや」に作る、

春もあくる蜑のたく火の明石がた煙に今朝やかすみそふらむ

早春鶯

鶯のうつろふこゑをはじめにて木のめもはるの色やわくらむ

鶯の初音をまつのかげしあればこゝにも千代の春をつくさむ

千代のかげ[　　]殘る松の上にいく春つげむ宿のうぐひす

桃葉御集第三句「のどけさも」に作る、

八雲たつ神のそのよのののどけさをのこすや初音春のうぐひす

梅はまだ待たれて咲かぬ幾日をも春の立枝にうぐひすぞ鳴く

早春梅

ふりまがふ雪の梅が枝いまもさぞめづるや神のちよのはつ春

早春松

十かへりの花もまじれど藤のもり松にやちぎる千代のはつ春

早春柳

今日こそは千代の初春あかなくにくりかへしみむ青柳のいと

氷解

きのふかもとけにしまゝに朝ごとの氷をも見ぬ池ののどけさ

氷始解

この比のこほりにさえし谷風もみつの春とは今朝よりぞ吹く

桃葉御集第五句「今朝よりやく」に作る、

靈元天皇

桃葉御集第四句「まだはつかなる」に作る、

吹くあとを氷のひまに今朝見るもまだわづかなるみつの春風

桃葉御集第三句「今朝見えて」に作る、

とけそむる汀ばかりに今朝は見てこほりにいそぐ池のさゞ波

桃葉御集第三句「汀とや」に作る、

今朝のあさけ氷をわたる春風のあとめづらしき池のさゞなみ

うす氷こぞとぢそめしみぎはにやあともまづ見る池の春かぜ

春風のわたりしみぎはあと見えて氷をわくる今朝のさゞなみ

桃葉御集第一句「今朝の氷」に作る、

今朝氷とけぬるあとのさゞなみに池のこゝろの春も見えけり

春到氷解

桃葉御集第四句「色ふきかへす」に作る、

こほりゐし河邊うちとけ鴨の羽の色ふきながすみつの春かぜ

池氷盡解

こほりとくあとの春かぜ水もせにまた吹きそめつ池のさゞ波

雪消氷又釋

朝ごほり春にはあへずながるめりたつ岩波のまさるゆきげに

とくるこほりの

桃葉御集第二句「よどむ瀬もなく」に作る、

はつせ川よどむともなしくる春にとくる氷のうきてながるゝ

子日

あたらしき殿づくりして立ちかへる春に千年の初子の日せむ

いくちよも齢を野べの春に見む初子のけふのまつにひかれて

これもまた神ぞしるらむ春日野の子の日に祝ふゆくすゑの春

正朔子日

立ちかへるとしも初子の今日はなほ松に色ます春のことぶき

子の日して今年は千代の松をさへ三の始めにそふることぶき

朝子日

靈元天皇

今朝の霜拂ふ小松の千代の色もまづあらはれて引く子日かな
小松原けさうちはらふ霜の後の子の日ぞ千代の春をあらはす

山子日

龜の尾の山に根ざすやよろづ代を松にかひある子日なるらむ

社頭子日

千代のかげもさこそ子の日の松の尾に同じみおやの神垣の春

子日松

かげたかく見む春遠き松の上にまづ袖かけて引く子の日かな
よろづ代とよばゝむ聲を春日野の小松がすゑに契りてぞおく
千代いはふ松を初子の今日よりや心も野邊のはるに引かれむ
うゑしうゑば幾千年をば春ごとの子日の松にかぞへそへまし

桃葉御集第三旬「かすが山」第五句「契りてぞ引く」に作る、
桃葉御集第一第二句「うつしうゑば幾千年をか」に作る、

いやつぎに幾世もつきじ春ごとの子の日に契る松の千とせは
手にみてる緑は松の二葉より千とせをこめて引く子の日かな

子日友

ひきつれて契る子の日のけふの友いく春野邊の松とつげまし

子日興

野邊に出でゝ春のかすみをくむ袖も今日ぞ初子をいはふ松風
小松ひきあそぶ春野の心をもそへてみぎりの子の日にぞ思ふ

子日祝

いく千代とかぞへもしらず春ごとの子の日に契る松のゆく末

霞

世におほふ霞の袖にあまるこそあまねき春のめぐみなるらめ

桃葉御集題「子日催興」第四句「うゑてみぎりの」に作る、

春がすみゆたかにたてる袂にもつゝむにあまる千世の色かな

桃葉御集第四句「霞むみるめも」に作る、

おきつ波八千代をかけて八十島の霞むみるめにあかぬ春かな

ふるとしのあらしも雪もうづもれて春のひかりをしく霞かな

千代こむる春の色とは神がきの松に見せても立つかすみかな

桃葉御集第四句「わけぬる杜の」に作る、

峰の雪みやこの野邊のみどりをもひとつに見せて立つ霞かな

やはらぐる光を春のあさがすみわけいる杜のおくの木ぶかさ

霞知春

人ごゝろのどけきよもの霞にもあまねき春のめぐみ知られて

桃葉御集第二句「はる知りそめて」に作る、

いつのまにはるたちそめて明くる夜の光まちとる霞なるらむ

天つ空のどかに見えて來る春のなほ色そへて立つかすみかな

この山の名にもおとらぬ春日とや今日は霞のみねに立つらむ

松の尾の山のかすみのみどりよりまづ見る千代の春の初しほ

神垣に千世をこめたる春ぞとはかすみもしるやまつのをの山

桃葉御集第二句「日をふる雪を」に作る、

こゝろとく春しりそめて花鳥のおそきを急ぐかすみとぞ見る

霞始聳

のどかなる峰の朝日にたぐひてや春のかすみは匂ひそむらむ

住の江の春もてはやすみるめとはかすみやそめしあはぢ島山

やはらぐる光ながらの春の色にけさよりみつの峰ぞかすめる

春きても日をふる雪げなごりなく曇らぬ空やかすみそめけむ

明石がた春とばかりに立ちそめて島もかくれぬ朝がすみかな

霞添春色

のどかなるよもの霞の春の色に山もみどりのまゆひらきつゝ

曉霞

春の色をほの〴〵見せてかすみさへたなびきそふる峰の横雲
のどかなる長鳴鳥の聲のうちにおき出でゝ見ればかすむ横雲

朝霞

浦とほく立てるやかすみ波風もなぎたる朝のみるめのどけき
朝日かげにほへる山の尾上よりそむるかすみの春のくれなゐ
峰たかくかすみて出づる春の日ののどけき影はこゝも隔てず
曙のそらにまがへて見し色ややがてもそれと今朝かすむらむ
出づるより春のどかなるいろ見せて霞をそむる朝づく日かな
あはれともたが見ぬ春に洞の名を今はたのこす朝がすみかも

桃葉御集第五句「みるめほのかに」に作る、

薄暮霞

くれぬとて寢にゆく鳥の聲ばかりかすみがくれに殘る山もと
暮ふかくかすみにけりな殘る日の影見し山もそことなきまで

山霞

朝日かげ匂ふばかりに見し山もゆふべは深くかすむいろかな
今朝見れば四方の霞の春の色にたちもらさるゝ山の端もなし
春の色にあらそひかねてしがらきの峰の嵐もけさかすむらむ
時しらぬ名にのみ立ちてふじのねの雪もひとつに霞む春かな
春のきる衣のぬきのいとか山かゝるもうすきあさがすみかな
時しらぬ山やいづれとたどるまでふじのみ雪もかすむ春かな
今はまた外山も見えずたかさごの尾上のかすみ日數かさねて
春の色と見やはとがめぬ昨日けふたゝは淺間の山のかすみに

桃葉御集第五句「かすむ比かな」に作る、

桃葉御集第五句「山の霞も」に作る、

たゞ一重たてるも山のをちこちに同じかすみの色やわくらむ

桃葉御集第三句「なちかたに」に作る、

ほのかなる峰のかすみに面なれて外山をこむる色はめづらし

今朝はまた山の端見えてさほ姫の衣手うすく立つかすみかな

千代こめて更にかすみの色まされことし手向もみつの山の端

霞む日の山をしづけみたのしまば猶ことぶきの春やへなまし

山朝霞

朝日影にほふたかねもけしき立つかすみに春の色ぞのどけき

朝山霞

峰たかく出づる春日の名もしるくひかりやはらぐ今朝の霞に

桃葉御集脳「霞滿山」に作る、

霞隔山

このごろの霞は山のすがたにてみねもふもともわく色ぞなき

昨日まで外山にのこるまゆずみの匂もきえてかすむあけぼの

をのへより見そめし春のいくかとて外山もけさは霞たつらむ

峰の雪ふもとの木々のみどりをもひとつに見せて霞む山かな

よろづ代をかすみにこめて三笠山春のどかなる聲よばふらし

遠山霞

たゞひとへ立つやかすみの袖かけて遠山姫ぞはるを見せけむ

桃葉御集第五句「春を見せける」に作る、

春さゆる比良の深雪も色消えてみやこの北に今朝かすむなり

霞遠山衣

かすみ立つ遠山姫のうすごろも春とやみねにかけてほすらむ

遠山霞薄

かすむともこゝにまだ見ぬ春の色を遠山まゆぞ匂ひそめぬる

桃葉御集第二句「空にまだ見ぬ」第四句「遠山まゆに」に作る、

連峰霞

たちつゞく霞を見せてをちこちの峰もひとつにほふ山まゆ
ゆたかにもたてる秋かかすが山あたりの峰をつゝむかすみは
立ちそめてまだうすからし遠近の峰にいろわく春のかすみは
うすくこき霞のくまに墨がきもかきえぬ峰をたゝみなしつゝ
いく千尋たなびきわたす霞をかつゞくあまたの峰に見すらむ

嶺樹霞

はつせ山みねのかすみの春の色にゆづきが下も雪やのこらぬ
春あさき色とも見えずはつせ山ひばらにくもる峰のかすみは
くらま山こぶかき峰の朝な〳〵かすみもはやく色やそふらむ

野外霞

桃葉御集第二句「たてる秋の」に作る、

やはらぐるひかりを神のかすが野は霞も春もかぎり知られず
春日野に立つや霞のすゑとほみかぎりしられぬ春を見すらむ
つねに見る山もいづくとたどる野の霞の千里かぎり知られず

野外朝霞

そことなくあくる野原の末見えて山もかすみを出づる日の影

野徑霞

神垣はかすみの色もむらさきの野をゆく袖やさぞなのどけき
とほからぬ山も林もうすがすみわけゆくまゝに野べぞ春めく

關路霞

關の戸に聞きしやそらね鳥がなくあづまの山は霞む夜ぶかさ
あふさかの山こそかすめ行く年をへだつる關路春はこえきて

桃葉御集第五句「春はこえつゝ」に作る、

橋霞

夕がすみいざよふ波にかげたえてなかばは見えぬ宇治の河橋

わがためにあらぬかすみの衣手もはるやかたしく宇治の橋姫

江上霞

霞にはこもり江とてもみなれ棹さして舟路はたどりしもせじ

さほ姫の袖につゝめる玉つしま入江のかすみあかずこそ見れ

霞中瀧

佐保姫のかすみのころも春の日にさらすやいづく布引のたき

河霞

かすむ日は音ばかりして音なしの名や河波に立ちかはるらむ

立ちつゞく霞や千さと大井川しもはかつらのなみもほのかに

桃葉御集第四句「名や河上に」に作る、

海霞

あまごろも春の霞のうすきこそはてなき波のみるめ添へけれ

海上霞

蜑ごろも春のかすみの浦波や名に立ちまさるみるめなるらし

おきつなみ朝日まつまのくれなゐは霞や海を出でゝそむらむ

春の日のひかり隔てぬのどけさに鹿島の波も今朝かすむらむ

海上晩霞

海ひろくみつ潮ぐもりそのまゝにくるゝゆふ日や霞なるらむ

海邊霞

たまつしま入江のかすみうちなびき春まちえたる和歌の浦風

たぐひやはありその海の夕なぎにかすみにまじるおきつ白波

桃葉御集第四句「くるゝ夕や」に作る、

浪風もきのふまでこそあら潮の潮の八百路に立つかすみかな
うらゝかに田鶴も聲して和歌の浦のかすみ色ます春の朝なぎ
千重に立つみるめならでも春ぞとは石見の海の霞むのどけさ
春の色のいづくはあれどかすみ立つみるめもさぞな鹽竈の浦

浦霞

浦かぜもおよばぬ空の海かけて立つやかすみのおきつしら波

春濱霞

春の波のみるめそへけり濱かぜのふきあげの空になびく霞も
のどけしなみつの濱松まちえたる春のみるめにかすむ海邊は

湖上霞

こほりゐしみぎはの波やかすみにもまた遠ざかる志賀の唐崎

湖上朝霞

さほ姫も今朝やかげ見ぬかゞみ山さゞ波かけてかすむ海邊に

社頭霞

すゑとほき春をこめたる神垣のしめ野のかすみ色ものどけし
やはらぐるひかりを見せて雪さむみ北野の原もかすむ春かな
やはらぐるひかりやかすみあふぐにもたかつの山の神垣の春

水郷霞

桃葉御集第二句「春にかはらで」に作る、

いくよゝの春にかはらず水無瀬川山もと遠くかすむひかりを
たましまや河上とほくかすむ日にかへる家路を誰たどるらむ

霞隔遠樹

かすめどもありとは見えてはゝき木に似たる野中の松の村立

松上霞

田鶴が音も春のどかなる色そへてかすむこずゑの高砂のまつ

霞春衣

春といへば峰のいはほにそでかけて天の羽衣たつかすみかな

から衣かけてほすかと佐保姫の名にたつ山のかすむをぞ見る

桃葉御集第五句「かすみにぞ見る」に作る、

春日野や春はみどりのすり衣うらめづらしく立つかすみかな

さほひめの名にたつ山の春のそでうちはへかすむ春日野の原

桃葉御集第三句「織る手にも」に作る、

佐保姫のけさから衣織る手をもしづはた山のかすみにや見む

春やときかすみのぬきのうすごろもかさねぬ袖にさゆる山風

桃葉御集第二句「大山守の」に作る、

まだき立つ春のかすみに花鳥のあや織りそへむ比もまたれて

ゆたかなる杣山守の春のそでかすむやそれと世におほふらむ

霞隔行舟

河水はすゑまでしろき山もとのかすみにまがふあけのそほ舟

鶯

梅やなぎ世は皆春の色に香にもよほしたてゝうぐひすや鳴く

桃葉御集第五句「鶯の鳴く」に作る、

待早鶯

この朝け待てばこゝろの春やとき初音やおそき宿のうぐひす

舊巣鶯

まだきより鳴きてや谷の舊巣をも人にふるさぬ雛のうぐひす

桃葉御集第二句「すだちし谷の」第四句「おもひとくとや」に作る、

こゝにまづすもりし谷のこゝろをばおもひおかずや鶯のなく

初鶯

窓さむみおもひもあへぬ朝霜にはつね春なるうぐひすぞ鳴く

桃葉御集第三句「霜朝に」に作る、

はつうぐひすの

百鳥もさそはれよとやおのが音を初うぐひすの春告げて鳴く

桃葉御集第一句「百鳥の」に作る、

鶯告春

春の日の光は誰もたどらぬをわれつげがほのうぐひすや鳴く

桃葉御集下句「われつげがほに鶯の鳴く」に作る、

霜朝のさむさいとはぬうぐひすやおのが心のはる告げて鳴く

宮づくり千代のはじめと此春を神にも告げてうぐひすや鳴く

わかゞへる今朝の初音のうぐひすや老を忘るゝ春しらすらむ

いとはやも春つげそめて春日野の雪間を急ぐうぐひすや鳴く

治まれる世をも告げゝりうぐひすの春を樂しむ今朝の初音は

桃葉御集第四句「おのが名しるや」に作る、

君に今もゝよろこびの春つげておのが名しるき宮のうぐひす

春風のしるべよりこそ花の香も待ちあへず鳴くうぐひすの聲

鶯知春

なみの花に春は知るとや谷の戸をなれもうちいでゝ鶯のなく

桃葉御集第一第二句「なみの花春を知るとや」に作る、

春さむみまだ時わかぬ百鳥のおどろきぬべきうぐひすのこゑ

聞鶯

梅はまだにほはぬ春を心とくまづ知りそめてうぐひすの鳴く

鶯馴

うぐひすにとはゞや宿をなれて來る窓はくれ竹さける梅が枝

霞中鶯

花鳥もわすれてむかふあけぼのにかすみ色そふうぐひすの聲

霞中聞鶯

立ちこめて花もみどりもわかぬ日に霞の千里うぐひすぞなく

桃葉御集第五句「うぐひすのこゑ」に作る、

曉鶯

もゝしきのそのよの春の音にや鳴くともし火のこるまどの鶯

曉更鶯

梅かをり月もねざめをとふ窓に後しのぶべきうぐひすのこゑ

梅かをるねぐらしめてや有明のつきと花とにうぐひすの鳴く

桃葉御集題「曉鶯」に作る、

題桃葉御集に據て補ふ、

〔朝鶯〕

さえし夜の霜もけぬべく鶯のはつねのどけきあさぼらけかな

朝日かげうつるかた枝の春の色に初音おくれぬ宿のうぐひす

草も木もまだ冬ごもる朝なゝなにを春べとうぐひすの鳴く

聞くたびにあかずもあるかな春の霜さむきあさけのまどの鶯

のどかなる聲めづらしな朝霜の竹の葉さやぐまどのうぐひす

桃葉御集第三句「春の野も」に作る、

あたらしきやどの春しる鶯の今朝のはつねやおのがことぶき

毎朝聞鶯

神のます杜のうぐひす朝なゝしめゆふおのが聲もこだかき

夕鶯

うぐひすもこなたの窓にうつる日の夕のどけき影したふらし（なりイ）

夕日さす岡邊の松のうぐひすも春はわきけるこゑに鳴くなり

のどけさをあかぬものとや夕日影のこる梢にうぐひすの鳴く

鶯出谷

出づる日をみちびく春のしるべにやさそはれなましたにの鶯

うぐひすの出でし巣守にたれなりて谷にはよその春慕ふらむ

春かけてすだちし谷の心をもおもひおかずや出づるうぐひす

桃葉御集第三句「たれやりて」第五句「春わするらむ」に作る、

春のひかりげによそなりと谷の戸を出でゝ知りぬる鶯やなく

野鶯

聞くまゝにさぞなといまだわか草のねよげにも鳴く野邊の鶯

雪さむき谷のこゝろもうちとけて裾野の春にうぐひすや鳴く

朝ぼらけ梢も見えずかすむ野に千里をかけてうぐひすも鳴く

關路鶯

桃葉御集第五句「うぐひすぞ鳴く」に作る、

ゆきやらで聞けばとざゝぬ逢坂に春の關もるうぐひすのこゑ

うぐひすの人來とつぐる聲にもやこゝろたゆまぬ春の關もり

故郷鶯

春いくよふるの都はうぐひすも花になみだをそゝぎてや鳴く

園中鶯

梅やなぎまだき色香をたづね來て春しりそむる園のうぐひす

竹鶯

世は春のうぐひすなるゝ窓の竹花さかぬをやうきふしにせむ

桃葉御集第二句「初音ならずや」に作る、

くれ竹にうつりて鳴くや木草にもあらぬ花なるうぐひすの聲

竹林鶯

ふるす出でゝ羽ならはすや山かげの竹の林にうつるうぐひす

春もげにおくある竹のはやしかな初うぐひすの雪に鳴くこゑ

桃葉御集第三句「まづとぢて」に作る、

竹しげき外面の春をまづとひて人にはうとき今朝のうぐひす

竹籬聞鶯

うつり來て籬の竹のたかきにもあらぬ小枝にうぐひすぞ鳴く

隣家竹鶯

わが園の外に鳴くをも吳竹のよそならず鳴くうぐひすのこゑ

〔松間鶯〕

題桃葉御集に據て補ふ、

咲きてちる色香は知らぬ松が枝に花とやいはむうぐひすの聲

色まさるみどりはいはじうぐひすの初音を松の一しほにして

よろこびの聲もそひてや神垣にちとせを松のえだのうぐひす

梅近聞鶯

袖ちかき匂ひにまじるうぐひすの初音もけさのあかぬ梅が枝

羇中聞鶯

谷に鳴く初うぐひすも旅の身は物憂かる音に聞きつゝぞ行く

鶯爲友

おのが音もいへば言葉の花を思ふこゝろの友よ春のうぐひす

世にすめば人來といとふかくれ家の心の友やうぐひすのこゑ

花を思ふこゝろの友と春をへてわれに馴れぬる園のうぐひす

鶯呼客

たれを待つやどと知りてか鶯のこぬ人さそふ音とも鳴くらむ

鶯聲和琴

うつしとるそのよのこともあかぬ音をしらべにそふる春の鶯

鶯入新年語

うぐひすのさへづる聲も幾たびか人にこたふる春のことぶき

春情有鶯

おのがため梅も柳も軒ちかくうゑしは知るや馴るゝうぐひす

若菜

それと見ていつより摘まむ野邊はまだ若菜は何もわかぬ二葉を
きのふけふ雪げの澤におりたちて摘むもすくなき水のふか芹
幾春をつみける道もこれぞこの若菜にとほくいはふゆくすゑ
摘みてこし野邊をば知らず初若菜むかふ心のはるぞのどけき
かすが野の二葉の若葉名もしるく老せぬ春をいくよ摘まゝし

若菜知時

めづらしなまだ冬さむく見る野邊に春をわかなのもゆる緑は
摘みそむる若菜につけて春日野の野守も春のこゝろをや知る

〔若菜稀〕

春寒み萌ゆともいまだつげぬ野に今日七草をいかでつまゝし

尋若菜

桃葉御集第四句「若菜も何を」に作る、

桃葉御集第二句「まだ雪さむく」に作る、

甄桃葉御集に據て補ふ、

いづくにか摘みて歸らむ春日野の野守もつげぬ今日の若菜を

求若菜

里遠く行きても摘まむたづあさる澤邊はまだき根芹もぞある

雪中若菜

いつしかと尋ねてわけし跡よりや雪間は見えて若菜つむらむ

朝若菜

出でゝ摘む野邊にも知るやこの朝けわか菜にむかふ春の心は

野若菜

こゝろをば野邊の若菜のわかえても摘まばや老のゆく末の春
いつしかと摘まばやさむき春の野にさこそ若菜の雪の下もえ
雪もけさふるから小野の初若菜春のこゝろをわすれてぞ摘む

桃葉御集第五句「春の心を」に作る、

桃葉御集第三句「春野にも」に作る、

つみそへむ春を老せぬおなじ名のわかなにちぎれ野べの諸人

今よりの野邊のみどりの初若菜はつかに萌ゆる色もめづらし

誰かつむまだ冬がれの下萌は生ふる野邊とも見えぬわかなを

春日野の若菜にちぎる年をへてよはひも千代の春やつまゝし

原若菜

七ぐさの數つむことや今日はまたかた野の原の雪のしたもえ

田邊若菜

出でゝ摘む翁もあれや遠からぬ門田のくろに生ふるわか菜は

水鄉若菜

少女子が家路をちかみたましまの河邊に出でゝ若菜つむらむ

〔多春採若菜〕

桃葉御集第四句「若菜にちぎる」に作る、

題桃葉御集に據て補ふ、

よろづ代の春をちぎりて心をも野邊の若菜や摘みはやさまし

春雪

ふりそめしおもかげかへす山風や春もあらちのみねのあは雪

春さむみいふばかりなる朝風につもらぬ雪はけふも散りつゝ

あは雪はふれどたまらぬ松の葉にこぞの嵐のこゑぞのこれる

去年の雪とけぬる庭の苔の色を春のみどりのはじめとや見む

春雪似花

春は來ぬこれもまづ咲く花と見てえならぬ雪の枝やかざらむ

殘雪

さえかへり春もあらしの松にこそ友まつ雪はなほのこりけれ

野外殘雪

桃葉御集第一第二句「ふりこめしおもかげかくす」に作る、

わか草のつまもいづくにこもるらむまだ雪うづむ武藏野の原

垣根殘雪

春のくるあとともなくてかずならぬかきねはこぞの雪の下道

竹殘雪

下折はかさなる竹の葉をしげみ去年見し雪ものこるひとむら

春きても北なるまどのくれ竹はしげみにこほる雪をのこして

桃葉御集第二句「跡だになくて」に作る、

桃葉御集第五句「のこるくさむら」に作る、

桃葉御集第五句「のこるしら雪」に作る、

くれたけの去年の下折そのまゝに青葉も見えずのこる雪かな

松殘雪

年の端のさかえに見よと千世の色を松にふかめて雪や殘れる

つれなくてのこれる友を松が枝に雪もちとせの色やならはむ

春日さす軒端に見れば松の雪消えあへぬ色もあたゝかげにて

桃葉御集第三句「松の雪の」に作る、

消えやすき雪もこほれる葉をしげみ松にとのみや猶殘るらむ

木殘雪

深山木は咲きて色めく花もあらじ雪だにのこれ春のしるしに

餘寒

立ちなれぬかすみの袖を吹きかへしまた雪さそふ今朝の山風

たちかへり雪げもよほす雲風は三冬つきぬるそらとしもなし

きのふけふまた冬ごもる窓のうちに春さへ四方の嵐をぞ聞く

餘寒月

さえかへり空はいとはずさよ風は月のかすみを吹くに任せて

桃葉御集第一句「さえかへる」に作る、

餘寒霜

木のめはる春の日かずのあさ霜はまた冬がれの枝にさえつる

餘寒風

みよしのは花のところのあやにくに山下風やはるもさむけき

たかならぬ春の嵐よ佐保姫のそで吹きかへし今朝はさゆらむ

雪をさへさそひ來ぬべくさえかへり小簾のまとほす春の朝風

木の間よりまがひし雪は猶ちりて花まちどほにさゆる春かぜ

〔餘寒嵐〕

春の色はさらでもうとき松の戸をこぞの嵐のなほたゝくらむ

朝戸出のたもとを寒み春もなほあらしにこもる窓のうちかな

餘寒氷

更に今こほるはうすきみぎはよりまた春風のあとや見えまし

曉餘寒

鐘の聲いくあかつきの猶さえてこぞのまゝなる霜をつぐらむ

さえかへる鐘のひゞきや春きての霜夜を更におどろかすらむ

山餘寒

うすく立つかすみにすきて雪しろき山邊は春も猶やさゆらむ

むめのはな

むらさきの一もとならで木々はみなにほふや梅の花の春かぜ

尋梅

咲きまがふ色はまだ見ぬ梅が香にいづれの枝の雪はらはまし

依梅知春

この花のいやはつはなに神がきのつきぬ春しるはるやいく春

栽梅

うゑそへておそくもとくも咲くやこの花は言葉の花の種かも

若木梅

ふりせずよ園生の梅のえだかはすなかに若木の花はわかれて

神がきにつきせぬ千世をことしより春しりそむる梅も契らめ

色も香もとしにぞ添はむ咲きそめてまだ春をへぬ梅の若木は

移しうゑてまだ春を經ぬ梅が枝は年にさきそふ色香をぞ見む

いく春か立枝の梅のことほく見えしわか木の咲けるはつ花

梅始開

にほへなほ春の色香のはつ花もまづ咲く梅のほかにやは見る

難波津にいま咲く梅のはつ花ものどかなる世の春やわくらむ

手折りても見ばやとぞ思ふ咲きそめて花めづらしき梅の一枝

桃葉御集第一句「神垣の」に作る、

露暖梅開

朝日さすかた枝の露に咲く梅や春さむからぬ香ににほふらむ

日影さすかた枝は露に春わきて花をいそぐとうめや咲きぬる

桃葉御集第二句「かた枝は露もに」に作る、

春風先發園中梅

吹くからにいととく咲きて春風のこゝろにかなふ園の梅が枝

挿頭梅

初春のちとせのかざしおなじくば老をもかくせたをる梅が枝

梅花盛久

神がきの春を色香に咲くうめは花のさかりものどかにぞ見る

多年愛梅

めづるよりことばの花も咲く梅の春のたむけやつきぬ神がき

毎年翫梅

さく梅の花もてはやすことの葉は千とせの春も神やうくらむ

桃葉御集題「毎春翫梅」に作る、

月前梅

月こそあれかすみの袖もつゝみえぬ梅はさやかに匂ふさよ風

香ばかりぞおぼろげならぬ咲く梅の花はわすれず霞む月にも

桃葉御集第一句「香ばかりは」に作る、

月照梅花

折しもあれ月はかすめる神がきにてれる星かと咲けるこの花

梅風

吹くもたゞ香ばかりならば梅が香に待たれむものを春の夕風

今よりも千とせをこめて神がきの春かぜとほくにほふ梅かも

桃葉御集第一句「今よりの」第五句「にほふ梅が香」に作る、

春風の木のもとさぞなたが宿としらぬ袖までにほふうめが香

おのれとはにほひおこさぬあたりまで誘へばかをる梅の下風

梅薫風

難波津のことばの花の春風やつきぬにほひをいまも吹くらむ

佐保姫のかざしの梅や春かぜの手にまかせたる香に匂ふらむ

咲く軒は知らぬあるじのなさけまで袖にぞあまる風の梅が香

梅香薫風

とりとめぬ風のしるべに尋ぬとも木のもとゆるせ匂ふ梅が香

梅花風靜

あかずなほ匂へこの花吹く風もいまは春べとのどかなる世に

依風知梅

梅が香も咲ける軒端はつげねどもこてふに似たるよその春風

雨中梅

いつよりも身にしみけりなしづかなる雨の夕のまどの梅が香

曉梅

いかにねむまだふかき夜の梅が香にさめぬる夢のあとの手枕

寢覺せしをりからいとゞ身にぞしむ色は有明のまどの梅が香

曙梅

ほのかなる花のひかりも色はえて咲くやこのよのあけの玉垣

朝梅

袖かけてまづ梅かをる今日よりや花をわすれぬ春のあさとで

春朝梅

とめゆかむ雪間もあれな朝かぜの梅が香とほきかすが野の原

夜梅

身にしめてくらせる宵の手枕におもかげながらかよふ梅が香

夜思梅

おもひ寢の夢をおどろく梅が香や見しおもかげの花のおひ風

梅薫夜風

さよ風のさそふやいづくともし火の花ふくたびに匂ふ梅が香

梅花夜薫

梅が香にさめてはをしむ夢もなしなほひまとめよ閨のさよ風

梅香

さそひ來て袖さへ匂ふ梅が香にうらみむ風のやどりともなし

梅有色香

桃葉御集第二句「名もいちじるし」に作る、

文このむ名もいちじるく神がきの梅は世に似ぬ色香そふらし

梅遠薫

桃葉御集第二句「野風にかをる」に作る、

吹きおくる野風はかをる遠方やしげきがなかの梅さかりなる

木のもとはおもひの外に遠くともよししるべせよ風の梅が香

梅久薫

みづがきに契りてにほへことしより春しる梅の花のわか木は

梅花久芳

いく千代を神のまに〳〵にほふらむことばの花の春の梅が香

よろづ代をこゝに匂へと千さと經てとほく北野の春の梅が香

梅花久薫

よろづ代を神のまに〳〵咲く梅は匂ひも春もともにつきせじ

梅交松

梅が枝は咲くとも見えず立ちならぶ松におとしてにほふ春風

梅交松芳

いく千代をしめ野内野の春かぜに松のこゑ添ひにほふ梅が香

梅かをり松もいろます春のやどこゝをも神はよそにやは見む

枝かはす木々のうめが香吹きまぜて松風よばふ千代の神がき

山路梅花

梅さける岩根木かげのやすらひにゆくかたおそき春の山みち

路梅

ゆきずりにほの見し袖の梅が香をありとやこゝに匂ふ春かぜ

行路梅

やすらひし木かげの道の家づとは折らでもあかぬ袖の梅が香
これもまた花あればとやとひよらむあかぬ行手の門の梅が枝

桃葉御集第四句「折らでもあれや」に作る、
桃葉御集第五句「宿の梅が香」に作る、

梅移水

ゆく水に梅が香うかぶ夕月夜おぼろげにやはながめおきける
咲く梅の花のしたゆくかきね水へだてぬ香にやかげも匂はむ
咲く梅の木のした水やかげうつる花ににほひの淵をせくらむ
見るかげは花にかきえぬにほひをもうつしゑなれや梅の下水
もろこしの春をば花のした水に見るかげさへもあかぬ梅が枝
ゆく水にかげを見つべき春もへぬ老いぬる梅の花のかゞはみ

桃葉御集第三句「かげうつす」に作る、
桃葉御集第四句「うつすなれや」に作る、

里梅

とひなれぬ里のあるじも咲く梅の花にたちよる人なとがめそ
梅が香の春かぜこゝに常ならばさとをばかれず人やとひこむ

里梅花

とめゆきて折らばや折らむ春風のにほはす梅は里とほくとも

故郷梅

軒端あれて人もすさめぬ梅が香のたが袖こふる春をへぬらむ
やどはいさ花はむかしの梅が香をとふやはつせの里の春かぜ

庭梅春久

神がきをへだてぬ花のうめが香に千とせもにほへ庭の春かぜ

梅花薫砌

玉すだれうごくばかりの春かぜに内外もわかずにほふ梅が香

簷梅

うぐひすもやどりにしめて一きはの色をそへたる軒の梅が香

梅香留袖

身にそへてねなむも嬉しながめつゝくらせる宵の袖の梅が香

寐覺梅

梅が香をまくらに殘すさよ風の夢はいづくにさそひすてけむ

梅浮水

散りぬればこほりのうへに見し雪のおもかげうかぶ梅の下水

梅散得客

あやなくもちりてぞ人にとはれぬる梅さきたりと待ちし軒端を

梅有佳色

いろ添へよ文このむてふ神がきの花にことばの花もならひて

梅慶年香

こぞの雪に咲きいでし梅も神垣の春まちけりな千代の色香は

冬ふかき雪のえだより咲く梅のおなじかをりも春やそふらむ

梅契多春

神がきの松とともにやよろづ代の春をちぎりてにほふ梅が香

梅萬春友

よろづ代の春にかならず咲く梅のあかぬ色香も神のまに〳〵

梅有遲速

雪のまどかすむ軒端におそくとく咲けるも梅の心をぞおもふ

風搖白梅朶

雪と見る色もにほひも梅がえにこほるばかりの春かぜぞ吹く

梅紅白

咲く梅はしろきを後の色ならでおくるゝ花の染むるくれなゐ

紅梅盛

たぐひなきいろの盛にくれなゐの梅をばわきて神もめづらむ

梅柳渡江春

時わかぬ梅をもめづる春の江にやなぎいろそひかすむ梅が香

柳

桃葉御集第四句「柳いろづき」に作る、

折らでしもかこひやすらむかげふかき柳にこもる賤が園生は

桃葉御集第二句「かよひやすらむ」に作る、

青柳のいとしもながき春の日に三度はさこそおきふしのかげ

柳辨春

いとはやも染むる色よりうちはへて世は春かぜの青柳のかげ

吹く風の色をみどりにかつ染めて春わくやなぎ蔭ぞのどけき

柳辨春色

立ちならぶ木末もいそげ青柳のいととく見する春のみどりを

春色柳先知

もえそむる園生のやなぎ春もまだ淺みどりなる色になびきて

柳絲緑新

あさみどりこゝろにそむる初しほもいく春かぜの青柳のいと

柳漸低

ころはまだ春の日かげもあさみどりはつしほぞめの青柳の絲

桃葉御集第二句「春の日かすも」に作る、

かつそめてなびくもあかぬ春の日のながきをそへよ青柳の絲

桃葉御集第二句「なびくもあかず」に作る、

柳靡風

柳にはよわしといはむ風もなし吹かぬまもなほ枝はうごきて
うちなびきのどけき風をすがたにて春の色なるあをやぎの絲

雨中柳

たれ見よとたてる柳ぞふる雨にうちたれ髪のあかぬみどりは

柳露

佐保姫の春のかざしの玉かづらかけてみだるゝあをやぎの露
折りかけてたがゆく袖のなごりをかおもひみだるゝ青柳の絲

柳帶露

今朝のまの露にこゝろもうちなびき春かぜまたぬ青柳のかげ

柳似煙

ことはむ里のしるべのけぶりかともえて柳のなびく一むら

路柳

別路にをしむこゝろを旅人のいとにもよるかあをやぎのかげ

行路柳

折らでゆく袖もあまたにふれつらむ道のちまたの青柳のいと

橋邊柳

道のべやわたる小川の橋のうへもなかばはおなじ青柳のかげ
遠く見ば繪にぞ似るべきあをやぎの陰より出でゝわたる川橋

垂柳臨水

春かぜにさゞなみよする柳かげいとのどかなる池のおもかな

水邊古柳

みくさ生ひてふりぬる池の柳かげおのれぞ春の色はすくなき

杉ならぬかげも老木の春をへてふる河のべにたてるあをやぎ

岸柳

うきぐさもなびくきしねの絲柳いづれかさきに春かぜの吹く

堤邊柳

初草のみどりばかりに萌えそめてつゝみの柳いろぞあらそふ

故郷柳

桃葉御集第五句「春風ぞふく」に作る、

とぢはつるむぐらの門もくる春の道しあればや靡くあをやぎ

田邊柳

桃葉御集第五句「いそぐみどりも」に作る、

青柳はまづそめけりなしづのをが門田の面にいそぐみどりを

隣家柳

中がきのそなたにたてる青柳も春をへだてぬかげおほふなり

若草

木がくれはつれなき雪のしたもえも若草山のみどりにぞしる

河邊ゆく芝生をひろみめもはるに見えてえならずあをむ若草

野若草

いろ添ふやいつの人まの春の草はこぶあゆみもしげき北野に

桃葉御集題「春草」に作る、

こゝかしこ青むばかりと見し色のやがても野邊をそむる若草

春草

桃葉御集第四句「雪間をけさの」に作る、

春あさき野邊の色かなかつあをむ雪間もけさの霜のしたぐさ

春さむくおく朝霜もこゝろせよまだうらわかき野邊の小草に

このごろの雪の下草わかやかにいろづく野べの春はめづらし

春草短（艸イ）

あさみどり枯生が下にかつ見えてまだつまごもる野べの若草

野春草

時しありと見ずや昨日の霜がれも忘草生ふる野邊のみどりを

下萌は野邊にこもれる若草のつまもあらはにみどり添ひゆく

見れどあかぬ野べの色かなわか草の新手枕もむすぶばかりに

行路春草

ふみしだく跡とも見えず道のべに萌えて色こき春のわかくさ

磯春草

桃葉御集第五句「野邊の緑に」に作る、

みるめほすあまの磯屋のかきねにも色はわかれて萌ゆる若草

これやこの春のみるめとよる波のおよばぬ磯にもゆるわか草

このめもはるの

桃葉御集第一句「これやまづ」に作る、

霜がれは見ざりし枝のあさみどり木のめもはるの心をやしる

早蕨

咲きてちる思ひの外にさわらびは谷にも春のをりえがほなる

岡早蕨

朝夕のゆくてながらや山がつのそともの岡に折れるさわらび

おもひあへず折りける袖の下蕨ありともしらでやすむ岡べに

春月

さやけさは限こそあれ小夜ふかくかすむあはれを月に思へば

かすめ月秋にくらべてなほざりに思ひおとさむ春のそらかは

晴れやらぬ霞のとがのおぼろ夜を月にかこつもうき習ひかな

あはれとやうしとや見まし見る人のこゝろなるべき朧月夜を

月前霞

ほのかなるかげに匂ひて山の端のかすみは夜も月に見えけり

霞中月

春の夜をあかぬものとや佐保姫のそでの中なるありあけの月

〔春月朧〕

老が身はなにの色めもおぼろよをわすれて月に猶やかこたむ

桃葉御集に據て補ふ、

雲もなくなぎたる月の朧夜ぞはるならで見ばいとはれぬべき

春曉月

なごりなくかすみはてなむ空もをし朧月夜のありあけのかげ

桃葉御集第三句「空もなし」に作る、

幾重ぞとありあけの月にかすむ夜の霞を知らぬ鐘のおとかな

有明はつれなきものと春の夜のことわり過ぎて月やかすめる

春曙月

かすむ夜の月ものこりて哀てふことをあまたの春のあけぼの

桃葉御集第五句「春のあけぼの」に作る、

えもいはぬ霞にめでゝ花鳥もほころびぬべきつきのあけぼの

春夕月

おぼろ夜の深きあはれを梅にほふゆふべの水の月にそへばや

春月幽

霞む夜のあはれも添はぬ月ならば曇るばかりになして恨みむ

桃葉御集第三句「月なくば」第五句「なりてうらみむ」に作る、

わすれては月にぞかこつ晴れぬ夜のうらみは春にふかき霞を

よしさらば深き霞のなかぞらにゆきがたたどるあたら夜の月

桃葉御集第四句「ゆきがたたどれ」に作る、

峰春月

花の雲こりしく山のたかねよりかすみを出でゝにほふ月かげ

江春月

春いく夜かすむなにはの都鳥つきやあらぬといまや鳴くらむ

桃葉御集第五句「今もなくらむ」に作る、

河春月

月はなほうつるともなき河瀬にも波はかすまぬ音のさやけさ

河上春月

春の夜は吹くやあすかの川風もたゞいたづらに月ぞかすめる

すむかげぞたゞ埋木のなとり川はるあらはるゝ月のかすみに

あすか風いかに吹くとも春の夜の月にかすみの淵瀬やは見む

桃葉御集第五句「淵やせくらむ」に作る、

春湊月

うきねいかに月はかすみの浪わけて出づるみなとの春の舟人

浦春月

吹きはらふ波にもかげぞかすみける月にはおよぶ浦風ぞなき

幽栖春月

月だにもすむ影見せずかすむ夜を身をなぐさめの淺茅生の宿

桃葉御集下句「身のなぐさめの淺茅生の奥」に作る、

八重葎さはらで春のこしあとをとめてや月もやどは訪ひける

桃葉御集第四句「とめても月の」に作る、

獨見春月

深き夜のあはれも知らぬ身ひとつの軒端の月に霞まずもがな

桃葉御集第四句「軒端の月と」に作る、

春曙

花に匂ひ月にはひかり有明のあかぬことなきはるのあけぼの

霞さへ夜をやのこさぬしろたへの花よりいそぐ窓のあけぼの

桃葉御集第一句「花にほひ」に作る、

いつよりもをしまぬ春の一ときやたゞ月花のあけぼのゝそら

世はなべて柳さくらのあるしもや霞をめづるはるのあけぼの

おもかげに都のにしきたつ日よりあかぬ霞のはるのあけぼの

いへばたゞかすむばかりの花鳥の色音もまさる春のあけぼの

江春曙

たまつしまいつはありともあけぼのゝ春の入江の霞をぞ見む

遠浦春曙

千重にして霞のなみのあけぼのに浦ふく風もなぎわたりつゝ

春曙鴈

わすれめや雲路の鴈の名殘までながめおきける春のあけぼの

桃葉御集第四句「ながめおきぬる」に作る、

月花のほかにも鴈のこゝろをばとめぬうらみはあけぼのゝ空

桃葉御集第三句「わかれをば」に作る、

春曙眺望

みよしのやおくある山のみねつゞき櫻にしらむ春のあけぼの

目にちかくむかふ草木のみどりかは野山の春のあけぼのゝ空

春雨

庭の面は降るとも知らぬ春雨のあやおる水に見えてしづけき

ぬれ〳〵て花おもげなる軒端には音せぬ雨のいろも見えける

春雨はふるともわかでくるゝ日のかすみにしめる庭の眞砂路

露見えて軒端ぞしめるながき日のかすめる空や雨になりぬる

曉春雨

春の夜のねざめの枕そばだてゝ聞けばそぼふる雨のしづけさ

桃葉御集第四句「聞けばほどふる」に作る、

曙春雨

春ふかき雨のしめりも色そへてかすみえならぬあけぼのゝ空

朝春雨

さほ姫のたが袂をかわかれきてほしあへぬ今朝のころも春雨
いつよりも晴れぬかすみの朝ぐもりあやしと見れば春雨の空

春夕雨

ふるとなく雨もかすみて暮るゝ日をのどかに告ぐる入相の鐘
くれにけり立ちそふ霞それも猶春のものとてあかぬながめに

夕春雨

つれ〴〵も思はぬ雨のゆふべかな明日の木ずゑの花をまつ比

夜春雨

しづけしな音せぬ雨も聞くばかりいをねぬ夜半のはるの枕は

谷春雨

ながき日をふれども春のあめのいとの細谷川の水もまさらで

桃葉御集第一句「つれ〴〵と」に作る、

桃葉御集第三句「雨の絲」第五句「水もまさらじ」に作る、

野春雨

日かずふる野はみどりにて若草のつまあらはなるころも春雨

庵春雨

雨かすむ末野に見ゆるひとつ庵さびしささぞな永き日ぐらし

庭春雨

雪とくるなごりばかりのしめりとは見えぬまさごや春雨の庭
淡雪のまじりし色はふり消えてかすみにうつる庭のはるさめ

歸鴈

春がすみかすみてもなほ鳥の道さはらぬものか歸るかりがね
いかでいつしばしとゞめむ天つ鴈をのへの花の雲のかよひぢ
慕ひわびぬ月にしらぶる琴の音もひきはとゞめぬ鴈の歸るさ

何かしたふこのあけぼのゝ春をさへ見すつる鴈の心づよさを
秋にのみこゝろをよする鴈がねや花の春しもかへりそめけむ
をりふしの名殘ばかりや思ひおく月のあけぼの霞むゆふべは
めづらしと今か聞くらむふるさとの春やみやこの秋の鴈がね
春秋のなかぞら遠くながめわびぬ今こむ鴈のわかれながらに

桃葉御集第二句「今は聞くらむ」に作る、

暮天歸鴈

思ひたつをりしもかへる夕ぐれの空にや鴈の身をたぐふらむ

桃葉御集第四句「雲にや雁の」に作る、

夜歸鴈

おもかげもとゞめじとてや春の夜の月なき空にかへる鴈がね

深夜歸鴈

小夜ふかき空ゆく鴈は面影のわすれがたみもとめじとやする

山歸鴈

霧わけてまた來む秋のおもかげも遠き山べにかすむかりがね

溪歸鴈

歸る鴈谷には春もとばかりを知らでやこゝにやすらひもせぬ

海歸鴈

こしの海やさらでも春はゆく鴈のうらやむ方にかへる浪かな

湊歸鴈

やどりせしかげの湊の蘆邊をもおもひおかずや鴈のゆくらむ

鴈別花

かへるかり都の花にやすらひてわかれかねつと見む春もがな

遠歸鴈

秋までの名殘もしらずゆく鴈の見るほどをだに遠ざかるそら

歸鴈遙

越の海やそらの海にもつゞくかと雲の浪わけかへるかりがね

歸鴈幽

をちかたの霞にかゝるひとつらやなかばかきけつ鴈の玉づさ

山こえぬ程はみやこの春の鴈それとなきまでかすむをも見む

鴈勝喚子鳥

あかでこそとばかり歸る心には似るべくもあらぬ喚子鳥かな

春駒

難波江やもゆるみどりの草の葉におなじ蘆毛の駒あさるなり

澤邊春駒

桃葉御集第五旬「きゞす鳴くらし」に作る、

あさりすと見ればかけりて春の駒澤べの水にかげもとゞめず

雉

子をおもふ道やは知らぬこゝろせよきゞす鳴く野の春の狩人

岡雉

若草のつまならぬ妻もこもるやと思ひ岡べにきゞす鳴くらむ

妹と我とねての朝けの岡のべに妻こふきゞすあはれとぞ聞く

野外雉

ありかをもあやな知られて狩人の入野のすゑにきゞすなく聲

雉思子

巢にこもる子を思ふとや狩人の入野のきゞす立ちさらで鳴く

狩人にありか知られて鳴く雉は身にかへてとや子を思ふらむ

鶴

春ふかきかすみに落つる夕ひばり床は草野のいづことかしる

雲雀

入日さす岡べに落つる夕ひばりつゆさむからぬ床やしむらむ

日かげ待つほどや芝生の朝露になほ床しめてひばり鳴くらし

なく雲雀さらぬも雲に入るといふ春の末野のそらにのみして

雲をさへしのぐとぞ見る夕ひばりかぎりもしらずあがる翅は

桃葉御集第四句「春の野末の」に作る、

夕雲雀

桃葉御集第二句「落つる雲雀の」に作る、

くれぬとて落つる雲雀はおのれもやあがれば悔の道はかはらぬ

雲雀落

それと見ぬ霞のうちに落ちくるも聲にしらるゝ夕ひばりかな

雲雀幽

いく千尋あがる雲雀ぞ見るがうちに雲のいづことわかぬ翅は

澤雲雀

この澤にあさるを見つる駒の毛のたゞ同じ名に立つ雲雀かな

野雲雀

桃葉御集第三句「かげあさみ」に作る、

雲雀なく野邊の若草かげを淺みいづこにおのが床はしむらむ

ひろき野にしめおく床はあらはにておなじ所にたつ雲雀かな

田雲雀

桃葉御集第五句「雲雀たつらし」に作る、

人けなきあしたのまのみふす床とたのむの原を雲雀たつらむ

喚子鳥

もろともに心をや入れぬ喚子鳥よべばこたふる山びこのこゑ

しるべとはたのまぬ山の喚子鳥たゞなほざりの人やさそはむ
ゆくかたをたどる深山の喚子鳥道のしるべに鳴く音ともがな

絲櫻

おなじくば梅が香なびけ絲ざくらやなぎに似たるえだの春風
花のうへに誰かをしまむ絲櫻いろにも出でよそむるこゝろは
名もしるくつらぬきとめよ絲櫻ちるてふことも花にしらじを

桃葉御集第五句「そむる心を」に作る、桃葉御集第二句「つらぬきとめて」に作る、

山櫻

咲きぬとは見る里人の中にまづたれかとやまの花をとふらむ
けふこそさくら
散らばまた恨やそはむさかりなる今日こそ櫻おもひなくとも

桃葉御集第三句「友にまづ」に作る、

花

白妙の雪ものこらぬをりしもあれまがふ色なきみよし野の花
咲くを待ちし山鳥の尾のながき日も花に向へばくるゝ程なき
とゞまらで散るともよしや花盛まちこし程の日かずなりせば
まがへたゞそれかと向ふそらめやは紅のもりの花のしらゆふ

桃葉御集第五句「みよし野の山」に作る、

無題

よそに見て過ぎうかりつる心をもしらじな宿の花のあるじは

待花

花にとくかぞへてみばやつれなさの心くらべにうつる日數を
待たで見む待つあやにくに咲きやらでつれなくつくる花もこそあれ
おもへ世になべての花のたぐひかは櫻のみこそ人に待たれめ

漸待花

木のめはる春としなれば咲く比もわかでぞ花のまたれそめける

雨中待花

うちけぶる木ずゑの雨もこのごろの咲く花いそぐ心をやしる

栽花

あやなくに猶ぞつれなき櫻花こゝろとゞめて植ゑしみぎりは

袖ちかくうゑし植うるも松かぜのおなじ軒端や花にうからむ

うつろはで久しかれとは宿に植うる花もあるじの心をやとふ

桃葉御集第一句「あやにくに」に作る、桃葉御集第二句「うつし植うるも」に作る、桃葉御集第二句「久しかれとか」第五句「心をや思ふ」に作る、

花有遲速

ふもとより散れば櫻のおくふかき吉野の春ぞさかりひさしき

尋花

花よいかに岩木なりとも岩根ふみわけこし道のわりなさを知れ

おもかげにたてるやいづこ花と見てゆけばあとなき峰の白雲

今日はまたわけつくさじな咲く比の山路は花にとほきゆく末

尋山花

色まがふ雲やいづことわけきつる山には花のおもかげもなき

桃葉御集下句「山にも花のおもかげもなし」に作る、

初花

待ちえたるかた枝の花の色に香にしひて盛をいそがずもがな

めづらしとむかふこゝろの花もけふいや初花の色香とやなる

見そむるはげにたぐひなき色香にてはやくも花にそむ心かな

待ちえたるやどのまどゐの初櫻けふぞことばに咲く花も見む

花始開

咲きそむるこの一ふさの色に香に花はさかりをくらべても見む

色も香もなべてはあらず植ゑしより待たれて咲ける庭の初花

咲きそめてかぞふばかりの木のもとはまだ花の香の春風もなし

花未遍

まだき咲く色香もよその梢にてやどにはいそぐ花のころかな

花盛

まちをしむ心やすめてくらす日も花にすくなき盛をぞおもふ

花盛開

桃薬御集第五句「日數をぞ思ふ」に作る、

色香をばあかぬ心にまかすともなにをさかりの花にくはへむ

花漸盛

桃薬御集第五句「花にくらべむ」に作る、

またもこむ片枝は花の咲きやらで明日のさかりを殘す木蔭に

見花

昨日見し名殘をけふの色香にておなじところの花にくらしつ

誰が春の心をよゝにならひこし見れども花にあかぬものとは

かつ見るはあたら色香に三の友いざとやいはむ花の木のもと

桃薬御集第五句「あかぬものかは」に作る、

靜見花

つくづくと詠めくらして心さへよるべくもあらぬ花の陰かな

からやまと言葉の花もけふこゝになかめて暮す陰はしづけき

桃薬御集第五句「陰ぞしづけき」に作る、

こゝろをもちらさぬ花に今日ぞしるうき世のほかの春の一時

思花

雨風のたがへぬ時もいとふまで花のうへのみおもふころかな

毎年愛花

としごとの雲居の櫻あかなくにいまゆくすゑの春もきて見む

翫花

花よしれ木づたふ鳥の羽風さへ思ふあまりにいとふこゝろを

木のもとに立ちて見居て見幾度か花になづさふ春の日ぐらし

花下忘歸

花のかげ月こそにほへたがやどにこよひ雲居の花にわすれて

仙人のすみかになして斧の柄もくたさまほしき花のかげかな

花未飽

色も香も思ふさまなる花ざくらいづれの春かあく時のあらむ

馴花

淺からぬ心なそめそ馴れゆけばこれも浮世の花にやはあらぬ

交花

□にもなれしや幾日花園の木のもと去らであくがるゝ身を

かつ散るもげにあかなくの木かげかな花の色香に袖を任せて

桃葉御集第五句「春の月かな」に作る、

櫻狩くれなばなげのしたぶしにあともまくらも花の香ぞする

花映日

たぐひなや春日うつろふかた岡の木末にあまる花のひかりは

夕日影さしそへけりな枝よりもあまるばかりの花のひかりは

日にみがく花のひかりは今こゝにつくらぬ玉の枝を見せける

月前花

くれそむる木の間に匂ふかげ見えて花にとられぬ春の月かげ

寄月花

心あれやなか〳〵花にあらそはで春しも月のおぼろなるかげ

月前折花

一えだの花にけたれむ色香かは月のかつらを折りそふるとも

寄雲花

しら雲と見しよりよゝの花にあかぬ春のあしたの三吉野の山

いくみねに咲きつゞきてか三吉野の櫻は雲にまがひそめける

風前花

匂のみさそふとするに散るころの花はのどかに吹く風もなし

風靜花芳

香ばかりをさそへば吹くものどかにて風にとがなき花の一比

〔寄霞花〕

立ちまよふ霞の色もたゞならでなほおもかげの花はへだてず

霞隔花

世に見せてかすめる花か佐保姫のつゝむたもとに餘る色香は

雨中花

うちしめりさらに加はる色香をも雨ならぬ日の花にしのばむ

をしと思ふ花をぬらさぬ袖もあれなこの春雨の空におほはむ

雨後花

散る花にきのふいとひし雨はたゞ雪なりけりと向ふ木のもと

寄露花

うちしめりさらにえならぬ色香まで花にこぼるゝ春の朝つゆ

花のしづくに

折る袖ぞぬれつゝあかぬあめの後のにほひこぼるゝ花の雫に

題桃葉御集に據て補ふ、

桃葉御集題「寄霞花」に作る、

桃葉御集第三句「色香をや」に作る、

桃葉御集題「花似雪」に作る、

花如雪

よしさらば春の色香のほかに見むちりのまがひの花のしら雪

朝花

今朝は猶花にふくめる露ながらこぼれてあかぬ色香をぞ見る

夕花

こゝろなく夕ぐれいそぐ入相のこゑにけたれぬ花のいろかな

かすまぬもとところがらかと夕日かげはなやかなれや花の梢に

故郷夕花

ふるさとの露けき春に袖ぬれて花をあるじと訪ふゆふべかな

花満山

山まゆのみどりもわかずさほ姫のかざしの花の色にうもれて

桃葉御集第五句「くれぬ日もなし」に作る、

ゆきて見ば麓や散るもまじるらし嶺まで花は咲きものこらず

雲かすみひとつに匂ふ花のいろの山よりあまるみよし野の春

暮山花

まてしばし花の陰ゆくみよしのは歸る山路のくれぬともなし

深山花

とはでやはあらしもゆるく枕ゆふこよひみやまの花と月とを

遠望山花

よそに見てこれもやみなむ花なれやかつらぎ山の春のしら雲

峰上花

桃葉御集第五句「さくら咲くころ」に作る、

しろたへの雲吹く風も匂ふかと峰もいくへのさくら咲くより

嶺上花

みねつゞき花をひかりに明けそめて横雲しろきみよし野の山

〔連峰花〕

咲きにけりいづれかいづれ吉野山花に名だゝる峰のつゞきは

遠嶺花

なほぞあかぬ雲ゐる峰にさく花のたかまの梢まがふよそめは

桃薬御集第四句「花にへだたる」に作る、

桃薬御集第五句「まがふよそめも」に作る、

岡花

折るそでの追風さへやにほふらむ花にゆきゝのをかごえの道

關花

はるはたゞ花やせきもるすゞか山ふりすてゝゆく旅人もなし

ゆきゝもる關ならずとも今日人をとゞむる花の陰はあらなむ

過ぎがての花にまかせてゆきゝをもしひてやとめぬ春の關守

桃薬御集第四句「しひてとゞめぬ」に作る、

野花留人

さくらがり花に一夜の宿からむ野守はゆるすかげならずとも

くれなばと思ひし野邊によし一夜ねての朝けの花や見てまし

杜花

よりて見る花もあまたの木かげにてゆきかたまどふ杜の下道

林間花

みどりのみしげる林もさく花に春はあまたの木の間をぞ見る

桃薬御集第五句「木かげをぞ見る」に作る、

水邊花

散らぬまも風のさゞ波さわぐにぞ花の鏡はくもるといふらむ

すゑとほくおもひの淵のいかならむさくらをわくる山川の水

河花

つねよりも岩波しろしよしの川見ざりしおくの花や散るらむ

不見花來渡江

雲まよふ生駒の花は難波江を漕ぎ出づる舟のまほにやは見る

社頭花

ひろまへの春に數そふしらにぎて花もや神のこゝろをばとる

古寺花

おしなべて山はさくらにこもりくの初瀬の鐘の聲にほふらし

山家花

見る人をまたぬ深山の春にしもあたらさくらの花のしたいほ

故郷花

みよしのはいかなる春の色香とて花に忘れぬよゝのふるさと

桃葉御集第五句「心とやなる」に作る、

松間花

咲く花を木のまに見する緑こそ今ひとしほの松にはありけれ

古木花

片枝なほ咲くはこゝろや花になす老いて朽木の深山ざくらも

花如舊

雲とのみ今もながめていにしへの春おもほゆるみよし野の山

花匂

雲のうへやわが世の昔見し春の花ならねどもはなはかはらず

花色

さほ姫のつゝむにあまる花の香をわがたもとにも春風の吹く

桃葉御集第五句「春風ぞふく」に作る、

よしや見むうつろふ後の花にこそ心をしむるいろは添ひけれ

花手向

さかりなる梢ぞたむけ花のときは花もてまつる神ならずとも

花慰老

霧のうちにありと見るてふ老らくも心や花になしてめがれぬ

花友

かきつらねちぎるや千代の春の友ことばの花のけふの雲居に

花春友

咲けばまた老の春をも慰めてなさけあるともと花をしぞ見る

花下逢友

さそはぬもおなじ交野の櫻がり花のところにいざくらしてむ

依花待人

とはるべき花の宿とはたのまぬもあたら色香に人ぞまたるゝ

依花客來

われにこそおもひの外の人めをも咲くより花は宿に待ちけむ

はなのあるじや

ならひこし花のあるじや春ごとに色香のほかの人めをも待つ

志賀花園

みやことて植ゑけむ花の色香にやよゝ咲きにほふ志賀の花園

志賀花園蝶

身をかへてあそぶてふの夢にだに見む春あれな志賀の花園

寄花懷舊

思ひ出づるむかしの袖の春の香をたちばなならぬ花もしのばめ

桃葉御集第五句「花も匂はめ」に作る、

寄花神祇

あとたれしそのかみよりや花の時は花もてまつる三熊野の宮

桃葉御集第二句「そのかみなれや」に作る、

花有喜色

萬代の春しりそむるみぎりとや色香をそへてはなも咲くらむ

桃葉御集題「花有嘉色」に作る、

逐年花珍

いやまさる色香なりけり洞の中の春四十へて見れどあかぬ花

毎春花有約

咲く比をたどらぬ春ののどけさにかくてぞ花は千代も待ち見む

落花

あやなくのことわりながら散りゆくも惜まで見ばや春の心を

桃葉御集第一句「あやにくの」に作る、

あだなるを恨みもはてぬ花の上は幾春あかで散るを見つらむ

名殘なほあかぬ櫻の木のもとに散る花ごろもあかずきて見む

よしさらば惜まで見ばや春ごとに待たれむとてか花は散るらむ

落花未遍

遲くとく咲けるをわきて花さそふ風のつらさもまじる比かな

落花隨風

花よいかにあひも思はぬ風にしも身を任せては仇に散るらむ

桃葉御集第五句「あだにちりなむ」に作る、

ちりぬるを恨みむ花のゆくへだに知らばや風の宿りならでも

行路落花

跡もなく散りしく花を吹きわけて風ぞゆくへの道しるべする

落花滿庭

散りはつる今朝こそ風のつらさをも庭しろたへの花に忘るな

曉庭落花

夜のほどに散りしもあかず庭むせの花にかさなる有明のかげ

〔落〕花埋苔

庭もせに花ちりうづむ苔の色をけさは青葉のこずゑにぞ見る

落花入簾

さそひくる花にとがむな春風はいくたび小簾のひま求むとも

花時鞍馬多

さくらがりおなじこゝろに乘る駒の花にいばゆる遠近のこゑ

野遊

花鳥をあるじになして思ふどちまどゐする野のあかぬ日永さ

遊絲

「落」字桃葉御集に據て補ふ、

はるゝ日の軒端のどけき春風にみだれてつきぬ空のいとゆふ

をとめごが天の羽衣おる手よりみだれそめてや遊ぶいとゆふ

野遊絲

淺みどり空もつゞきてひろき野に草の葉づたひ遊ぶいとゆふ

野外遊絲

からにしき野邊の緑もかすむ日にあやおり亂す空のいとゆふ

春日鷹狩

したひゆく道はかすみの末野にもつき尾の鷹の色やまがはぬ

遲日

一とせは程なきものよ春の日のくるゝまおそき空におもへば

春日遲

もゝしきや老せぬ門のながき日を長閑におくる春のいへ〳〵

三月三日

をとめごが今日は柳の花かづらかけてたちよる桃の木のもと

桃花

もみぢせぬ春のはやしに咲く花のくれなゐくゝる桃の下みち
おなじ色を薄くもこくも咲きまぜて桃の林のあかぬくれなゐ

伏見桃

伏見山ふもとのかすみはる〴〵と色どりわたす桃のくれなゐ
今日こゝに來てこそ見つれふしみ山やまもと遠きもゝの錦を

夕桃

よそになる日影をとめて山もとにくれぬはやしや桃の一むら

かへるさをたどりし谷の夕ばえもさぞなと向ふ桃のくれなゐ

桃花曝錦

散るさくらあればをりはへ咲くもゝに春の錦の中はたえせず

梨

かた枝さす花の光をくらべても涙よりしろきおふのうらなし

梨花

雨に見てえならぬ花の一えだはたがすむいほの軒のつまなし
おもかげの雨をおびたる一えだは折らでいかゞは山なしの花

山梨花

木の間なき谷にも月のかげ見せてくるゝ軒端のやまなしの花

燕來

鴈のゆく雲路はいはじつばくらめなれもいくその空をきぬらむ
つばくらめ今年もこぞの時しあればまた春風の空に來ぬらむ

簾外燕

こぬ人はわすれやしつる小簾のとにふるすの春をとふ燕かな
朝な夕なこすまきおろす軒端にもなれて巣造るつばくらめ哉
まぢかくぞ入りくるのきの燕ふるすは小簾のへだてばかりに

桃葉御集第五句「へだつばかりに」に作る、

菫

桃葉御集第二句「春をあかすぞ」に作る、

むれて來る春をあかずとつむ袖もいくよしめ野の菫さくらし

菫染袖

むらさきのねずりにあらぬ袖の色を花にも染めてつむ菫かな

野徑菫

なつかしきゆかりの色と菫さくむらさきのゆき摘みて歸らむ

徑菫

ふみしだく道の芝生のつぼ菫をしまで摘まむ咲きあへずとも

桃葉御集第四句「をしまず摘まむ」に作る、

苗代菫

つむ人もなはしろ小田のほそ道にふまゝくをしく咲く菫かな

籬菫

みどりなる草のまがきは秋のみと思ひし花に咲くすみれかな

〔夕〕蛙

草あをき池のつゝみの夕月夜をりにあひても鳴くかはづかな

〔夕〕字桃葉御集に據て補ふ、

河蛙

水とほくかすむ小川のかみつせに蛙つまよぶこゑぞ暮れゆく

田蛙

をしまるゝ春はいくかもあら小田に鳴くや蛙も聲のうらむる

せく水のしたまでけたぬ思あれやつまよぶくれの小田の蛙は

おのがうへにいかゞたのむの夕とて妻とふ蛙こゑうらむらむ

荒小田にきのふけふこそせく水をいつより待ちて蛙なくらむ

苗代蛙

桃葉御集第二句「下にもけたぬ」に作る、桃葉御集第四句「妻よべ蛙」に作る、

このごろのなはしろ小田にせく水を待ちえしごとく蛙なくらむ

蛙鳴苗代

おのがすむ山田の春をこゝろにや任する水のかはづ鳴くらし

苗代

早苗とり稲葉かるてふをり〳〵もまづ面かげにかへす小山田

とりそめてまだ初苗のみどりさへ苗代がきにあまりてぞ見る

運日苗代

きのふ見ぬ小田にも今日はしめはへて垣根かずそふ苗代の比

雨後苗代

雨の後見れば門田のなはしろにせき入れぬ水も餘りてぞゆく

夜のほどの雨もこゝろにまかせてや今日は水せくしづが苗代

夕苗代

水口をまつるかへさはくれすぎてかへる田長や道たどるらむ

あさりして鳥だにかへる山かげにながき日ぐらしまつる苗代

水邊苗代

せく水のたよりも近き澤邊にやまづなはしろの種はまくらむ

桃葉御集第一句「生ひそめぬ」第五句「餘るとぞ見る」に作る、

桃葉御集第三句「河邊にや」に作る、

苗代水

せき入れて苗代小田にまづぞ見る千町におよぶ水のこゝろも

春田

一とせのしわざも民のあらためてあらすきかへす春の小山田

春山田

ますらをが春の營み日をへてやあらすきかへす小山田もなき

躑躅

思あれどことに出でゝはとばかりや岩根の躑躅色にこがるゝ

これもまた岩にも松の下つゝじ種しありとや生ひ出でゝ咲く

山はみなときはの木々の下躑躅ひとりふりそふ色に咲くなり

躑躅紅

桃葉御集第四句「あらすきのこす」に作る、

くれゆかば日かげにも咲け岩つゝじ山下てらす花のくれなゐ

入日さすかた山つゝじいつよりも夕ばえしたる花のいろかな

澤杜若

淺澤の水より出でゝ咲く花のいろしもふかきかきつばたかな

歇冬

またや見むこの夕露に咲きそひて籬おもげにかゝるやまぶき

折歇冬

山吹のいろをあるじのこゝろにてこの一枝は折るもとがむな

蛙なく聲をも花に折りそへて行かばやいかで井手のやまぶき

夕歇冬

やまぶきのまがきの花の下露にねたる色さへまがふてふかな

河欵冬

河なみにながるゝ春の色見えてうつりゆく瀬のやまぶきの花

岸欵冬

散りぬともかげだにとめよ山吹のさきこぼれたる岸のした水

いはぬ色をいく春花のこゝろにてうごかぬ岸に咲ける山ぶき

島欵冬

山吹の花ゆゑ名にもたちばなのこじまの春をふねよせて見む

橋邊欵冬

谷かげやそことといは橋いはぬ色に咲きてぞうづむきしの山吹

欵冬藏橋

みちもなき岩根と見てや山ぶきのはなのそこなるゐでの河橋

わけみればたどりし井手の岩橋もなほやまぶきの花の中みち

庭欵冬

今さくもおなじ庭なるやまぶきや秋見し木々の色にかよへる

籬欵冬

とふ人に折りやつさるゝ山吹の花のまがきはゆふかひもなし

欵冬散

山吹のちりかゝりける夕ばえは何によそへむにほひともなし

名所欵冬

まれに來て見るわればかり里人はめでずやあらむ井手の山吹

藤

花といへど松に契れる藤ならばあだに咲きちる外に見ましや

咲くふぢの花にまかする春をへてもとの木立も見えぬ庭かな

藤花盛

むらさきのたゞ一本と誰か見むはふ木あまたの藤のさかりを

雨中藤

ふる雨をうらむらさきの花の陰しひて幾日とぬれつゝや見む

藤花隨風

咲くほども見えてすゑこす藤なみにこゑうちそふる松の春風

春かぜや松のこゑをも吹きまぜてなみよる藤の花にかすらむ

夕藤

ほのかなる梢はわかぬたそがれに藤の色こきかげをとひ見む

岡藤

桃葉御集第五句「藤のさかりは」に作る、

桃葉御集第五句「かげをとひこむ」に作る、

花にとは出でたゝぬもや咲く藤のかげに今木のをかごえの袖

路藤

立ちよりてかざしたらばや玉鉾のゆくてにあかぬ花の藤なみ

水邊藤

折りとればありしにまさる色香かな池の汀のふぢのしなひも

瀧下藤

咲く藤の波もあたりの岩こえてあらしにまさる春のたきつせ

池藤

咲く藤にいはほも松もうづもれて花のそこなるはるの池みづ

岸藤

咲きかゝる花とや見ましろたへの波もたちそふ岸の藤なみ

桃葉御集第四句「ありしにまさる」に作る、

桃葉御集第一句「咲きまじる」に作る、

「頭」字桃葉御集に據て補ふ、

巖〔頭〕藤

まだ見ずよ木々にあまりて巖にも咲く花かづらかゝるふぢ波

江藤

住の江のみるめは春のうみべにて花もかげそふまつの藤なみ

江畔藤

咲きかゝる藤江の岸にこぎよせて永き日くらす船のうちかな

松藤

桃葉御集第五句「春の契は」に作る、

咲く花にうづもれ殘る松の色もうら葉にまがふ藤のたそがれ

あだなれや松のうれこす藤なみも名にたつ末の春のさかりは

藤松樹花

松の千世をかけて十かへり見む春のまづ初花に咲ける藤かも

桃葉御集第一第二句「この山の名をいやたかみ」に作る、

桃葉御集匿「藤花遶家」に作る、

社頭藤

神のます山の名たかみ咲く藤の色にとられぬあけのたまがき

藤花繞家

咲きかゝる藤を軒端のよもに見て花のそこなる松のしたいほ

戸外藤

やよひにもなりぬと花を松の戸に咲きてこの比かゝる藤が枝

名所藤

かすが山いくよの春のさかえをか松にちぎれる北のふぢなみ

暮春

かぞふれば彌生も今日にくれはどりあやなく春の夢ばかりなる

花鳥の春もいまはの夕日かげかすむばかりをかたみなれとや

したはれてしばしとゞまる花鳥はありともくるゝ春や惜まむ

兼惜春

雲風にあとをとゞめぬはなどりも思ひかおきし春のわかれぢ

春已欲春

桃葉御集第四句「おもひかけこし」に作る、

つきはてぬ春のなごりよ花鳥を思ふばかりのわかれならでも

暮春月

ゆく春にしばしおくれて影なれし月だにしばし面がはりすな

したひてもなにをか春のいろと見む青葉の山のありあけの月

暮春雨

花にこそいとひしあめも色かへて若葉にそゝぐ春のくれかた

暮春水

かくこそはうつる彌生の早瀬川春にも水のゆくへをぞおもふ

桃葉御集第一句「かくこそと」に作る、

山家暮春

とはれつる花もしばしの春くれてもとの人めにかへる山ざと

暮春落花

春のゆく日かずをだにも待たでなど心みじかく花は散るらむ

暮春惜花

花をおもふ心もわきてをしむかなちりのまがひに春のゆく空

暮春藤

よそに見てかへるを春にかこちても咲くころつらき宿の藤波

桃葉御集第五句「花の下かげ」に作る、

行く春をいまいくかとも知らで見む花はさかりの藤のした水

咲く藤の今さかりなる陰にだに春よいくかもやすらひてゆけ

霊元天皇

暮春鶯

又もとへ春は過ぐとも梅が香のかたみなるべき宿のうぐひす

鳴きとむる花とやいはむうぐひすの散るあとしたふ聲の匂は

舟中暮春

舟もさぞかよはぬなみにゆく春のしらぬとまりを霞にぞとふ

ゆく春のみなとをしらば舟よせむ霞のなみぢ千さとなりとも

暮春鐘

入相のかねてもをしむなごりゆゑ春日みじかきくれごとの空

暮春聞鐘

花につきぬなごりもそひて春は今はつせの鐘の音やうらむる

暮春盃

ゆく春を惜しむまどゐに言の葉の數さへそひて廻るさかづき

殘春少

たづね見る青葉の底の花よりも春の日かずやいまはすくなき

山殘春

かへりにしふるすの山を求むとも春はいくかのうぐひすの聲

三月盡

あかずしてくるゝ名殘にあすよりや今こむ春を待つことにせむ

とまらぬを思ひもすてず今日ごとの春にはなれぬ心見ゆらむ

春天象

天みてる光にしるしあらたまの春にこもれる千代のはじめは

よもに今朝雪げはれたる空の色や春のみどりをそむる初しほ

春風

神がきにまづ咲くうめを吹きそめて花のいく木に匂ふ春かぜ

よものの空のどけき春を待ちいでゝいつかの風もふく時やしる

吹くもまだあたゝかならず寒からでなるゝはじめの袖の春風

春雲

よそに見て花ともたれかまがふらむたかまのみねの春の白雲

かつらぎやまだ春さむき峰の雲花とはいつかよそにても見む

春曉

こゝろして鳥もいそぐな月花にをしとおもふ夜のあくる東雲

明くる夜をかすみの殘す山の端にしひてわかるゝ春のよこ雲

桃葉御集第二句「かすみのこせる」に作る、

春夕

のこる日に色そふ花のやまかげは夕ばえ惜しく暮いそぐなり

春夜

かつ見るも猶あかずとて月花の春のいく夜をいねがてにせむ

桃葉御集第二句「猶あかずとや」に作る、

春山

もえわたるひとつみどりに春はたゞ若草ならぬ山の名もなし

春山朝

朝づく日ちとせのかげをこの山にしめのうちなる春ののどけさ

桃葉御集第一句「朝日影」に作る、

春日望山

宮居して今もあかずや水無瀬川ゆふべは春のかすむやまもと

春關

くれゆかばまたこむ春も一とせをへだつるせきに關守もがな

春水

日影見ぬこのした水の朝ごほりとくるもまたぬ春かぜぞ吹く

山家春

わらび折るおなじ友こそ山賤となりはつる身の春もとひけれ

春植物

くれなゐもみどりもあかぬ春の木の色香にとめる園のうち哉

春松

花ならぬみどりにあかぬ春の色かすむとほちの松のむらだち

松色春久

神がきの春いくちよにいくちたび松のみどりも若かへるらむ

もゝしきや大宮人のよろづ代を春へぬまつのはるにちぎりて

桃葉御集第三句「春の色や」に作る、

春松契齢

あかず見てよはひも千代と春ごとの緑にふりぬ松をちぎらむ

春松契千年

いく千代とさかゆる陰を契りおきてまつにかひある春の緑か

神がきも色まさる春にちぎりおきて更に八千代の松のひとしほ

松契萬春

いく春をむれきておのが千世も見む松にゆづるのつきぬ行末

松契多春

洞のうちの松のよはひは契りきぬちたび色まさる春やみてまし

神がきの春にまかせて花さかばいく十かへりの松のゆくすゑ

松柳繞池水

桃葉御集第一句「あかずとて」第五句「松のことぶき」に作る、

桃葉御集第四句「更に八千代を」に作る、

桃葉御集題「松契萬春」に作る、

松にそひやなぎにそひて龍鳥のふねも漕がなむ春のいけみづ

椿壽八千春

人の代となりても春の玉つばきありとも遠き八千とせのかげ

春竹契久

春の色の緑にあかでわが友と馴るゝやいくよ千ひろあるかげ

桃葉御集第二句「なりての春の」に作る、

春獸

なれもそのうしと見し世をわすれてや桃の林の春にあひけり

桃葉御集第五句「春にあひみむ」に作る、

草あをむ野邊にいさみてこゝろをもへだてずなるゝ春の若駒

春旅

花鳥にうさぞまぎるゝ旅ごろもはる行くみちは野邊も山邊も

春神祇

のどかなるみかげやあふぐ春日野の雪間をわくる今日の諸人

春祝

あひにあひぬ柳の絲のながき世によその國まで靡くためしは

としごとの手向つきせず咲き出でむ言葉の花やいくちよの春

春祝言

吹く風のこゑものどけしもゝしきや軒端の松の千世のはつ春

陽春布德

天地にあまねくみてり春のいろをたゞ花鳥のうへにやは見む

家々翫春

待ちえてはたれもこゝろの花鳥にわが家の園の春やたのしむ

まち得たる春のまどゐにたが宿もまづ咲く梅のかざし折るらし

風光日々新

かすみたち風のどかなる朝ぼらけそらにも春の色ぞ添ひゆく

朝な〳〵よもの霞もさほ姫のたもとゆたかにたちかさねつゝ

春到管絃中

物の音も人の心の春をえて千世にやはらぐるしらべ添ひけむ

江山春興多

春風はやなぎにかすむ山もとの江にふく笛もこゑぞのどけき

桃葉御集第四句「江にふく笛の」に作る、桃葉御集題「鶯花契多春」に作る、

鶯花契萬春

よろづ代のはるちぎるめり鶯の花に鳴く音はおのがことの葉

〔以上靈元院御集〕

歴代御製集巻十九終

歴代御製集巻二十

靈元天皇 二

夏

首夏雲

しろたへの雲の衣手なつのきてこれもかすまぬ空にほすなり

桃葉御集第五句「空にほすらし」に作る、

首夏朝露

春秋にあらぬを時とはしのもとの花は今朝おく露に咲くらし

夏はまづすゞしく見せて草も木もみどりを時とそむる朝つゆ

林首夏

名殘おもふ花のはやしもをりにあへば夏を若葉の緑すゞしき

桃葉御集題「林早夏」に作る、

見し花の林のこずゑなごりなくみどりにしげる夏は來にけり

今年生のまたかげそはむなつも來ぬしげきみどりの竹の林に

車をもとめて見るべく蔭しげるかへでのはやし色ぞすゞしき

桃葉御集第二句「とめて見るべし」に作る、

首夏水

夏かけて咲く藤なみのかげばかり水の春をもなほのこしけり

首夏藤

のこりけり春見し藤の花かづらはふ木は夏のかげしげるまで

よそに見てかへりし春の心にもかけてやしのぶ藤なみのかげ

田家首夏

夏木立うつすみどりにとりそへて門田の早苗うゑむとすらむ

首夏郭公

めづらしとこれも見そむるゆふぐれの卯月のかげに鳴く時鳥

更衣

散る花のなつしもあかでなれ衣そめし色香にかへまくもをし

花をおもふこゝろはかへぬ夏衣ひとへに風もまつとしもなし

名のみしてあらぬはなだの今朝の袖心にそめし色はのこらず

夏衣としへだてたる香にぞしむ花にそめしはなごりなくして

朝更衣

今朝ははや花に染めけるこゝろまでうすきにかふる夏衣かな

名殘なくかへてけるかなこの朝けおきいでしまゝの春の衣手

桃葉御集第四句「おきいでしまでの」に作る、

更衣惜春

をしと見しきのふの春の名殘なほ今朝はとゞめぬ衣がへして

貴賤更衣

はなに染めし袂こそあれをしまじな色香（空に）もしらでかふる衣は

山家更衣

こゝろもやかへてをしまぬ山住はいとふうき世の花染のそで

羇旅更衣

旅衣たちかふる今朝はふる里のなごりも花にそへてをしけれ

遅櫻

春のみとおもひし風のつらさをば今さく花にまたやいとはむ

尋餘花

慕ひわびぬ胡蝶に身をばまかせても青葉がおくの花を尋ねむ

稀に咲くありかはそこと夏山の花にさそはむまぼろしもがな

桃葉御集第五句「花や尋ねむ」に作る、

餘花似春

春くれし日かずも花のたどりてやおなじ色香にさける一もと

桃葉御集第三句「たよりてや」に作る、

新樹

花の木はなかに若葉のあさみどりわれはがほにも匂ふ色かな

若葉さへあかぬ陰とは花に咲き紅葉にそむる木々をこそ見れ

花の木は春の色香のそれならで若葉を見るもあかぬかげかな

花にきてなれしかげをもいづれとか若葉の櫻しげる木ぶかさ

すゞしさをまねくとや見む玉がしはやどす若葉の露と風とに

色ことにしげる楓のうすみどりこれやもみぢの秋のしたぞめ

見し花のなごりもとまるかげなれやしげらぬほどの若葉櫻は

枝も葉もとしにそひてやこぞの夏見しよりけなる庭の木深さ

新樹妨月

花に見し木の間もしげるこのごろの軒端は月の影ぞすくなき

花ちれるこずゑの若葉ともにこそ春はめでこし月をへだてゝ

新樹風

花に風いとひし春のこゝろをもかへで若葉のうへにこそまて

新樹朝風

うすくこき色をわか葉の露見えてすゞしくなびく木々の朝風

新樹露

あさからば若葉の露に風ふれてしげらぬさきも陰ぞすゞしき

露おちてすゞしかりける夜の雨のなごりしたゝる木々の緑は

山新樹

紅葉こそよそには見れどときは山時しる木々の若みどりかな

桃薬御集第三句「夏木立」に作る、

つくばねの蔭いかならむ夏きてはなべてみどりの端山しげ山

林新樹

しげりあひておなじ緑もうすくこき林はもとの木立ともなし

路新樹

あつき日にむかへばすゞむ陰ぞとやこの道のべにしげる柏木

桃薬御集第三句「若竹の」に作る、

新竹

千ひろあるかげに生ひそふ若竹は猶すゑ遠きよゝをこむらし

卯花

桃薬御集第四句「見し色かくす」に作る、

ゆく春のやどりとりける籬かと見しいろかへす咲ける卯の花

をりにあへば神まつるてふ袖の色にまがふ卯月の花の白ゆふ

とふ人をまたずしもあらぬこの比の卯花月夜たれにつげまし

桃葉御集第二句「またずもあらぬ」に作る、

雪に見し木々の下枝のおもかげに若葉すくなく咲ける卯の花

桃葉御集第四句「青葉すくなく」に作る、

月の中にありてふ名とて卯花はそれかとまがふ色に咲くらし

卯花盛開

とはれずば卯花月夜よゝしともつげばや庭のさかりすぐさで

卯花似月

しろたへの月のかつらを手にとりてうゑしばかりの庭の卯花

桃葉御集第五句「かげまよふらむ」に作る、

空に見ぬ卯花月夜よもすがらかげかたぶかずてらす木がくれ

卯の花はいかに咲きてか夕月夜あかつき月のかげまがふらむ

卯花混月

卯の花のかきねにしろき夕月夜おぼつかなさをたどる影かな

夕卯花

夕月夜なかにある名の卯の花やくれあへぬ影をまづ宿すらむ

薄暮卯花

夕月夜もるかげよりもしげりあふ木の下しろく咲ける卯の花

路卯花

雪をふみ波をやわくる河ぞひのをかべに咲ける卯の花のかげ

卯花隱路

道もせに咲けるさかりをわすれては雪かと思ふ卯の花のかげ

桃葉御集第四句「雪とぞ思ふ」に作る、

咲きうづむ卯花山のしたみちははらはぬ雪のあとや絶えなむ

桃葉御集第四句「ばらはぬ雪に」に作る、

溪卯花

谷の戸の日かげにやつくしろたへの卯花垣根くれぬひかりは

河卯花

袖ぬれぬ波やわくらむ卯の花の咲くかげとほき河ぞひのみち

桃葉御集第二句「波やかくらむ」に作る、

里卯花

玉河のかきねつゞきは咲きみちてその里しるき卯の花のころ

渡卯花

わけぬるゝ涙かと見えてかち人のわたる河邊にさける卯の花

桃葉御集第一第二句「わけぬるも涙よと見えて」に作る、

社卯花

神まつるそのかみ山のふもとや卯月の花もかくるしらゆふ

水郷卯花

春ならぬ垣根にさける花の名の宇治のわたりを誰かとひけむ

桃葉御集第五句「誰か」とひみむ」に作る、

遠村卯花

この里は咲く卯花もひさかたの中にある名のあひにあひつゝ

籬卯花

しげるてふまがきの夏もわすれぐさ雪間にかへす卯の花の頃

桃葉御集第四句「雪間にかへる」に作る、

さかりなるまがきのそらめさながらに卯花山とむかふ夕ぐれ

卯花作牆（垣イ）

春はなほへだてもあへず中垣に咲く卯の花もさくらいろなる

卯花隔隣

うづき垣うしとは見えじそなたをも咲きてへだてぬ花の心に

樹陰卯花

夕月夜もるとしもなきかげ見せて木の下しろく咲ける卯の花

卯花似袖

咲き出づるあなうの花の垣根道とはれし袖のよそめばかりに

葵

神祭る今日のあみれは世々かけて同じ挿頭のもろかづらかも

挿葵

神まつる今日かみしもの氏人も祝ふこゝろはもろかづらかも

神山のふたばの葵いくよをもかけてみあれのかざしなるらむ

桃薬御集第二句「今日のみあれの」に作る、

桃薬御集第五句「もろかづらして」に作る、

桃薬御集第三句「いくよをか」に作る、

露ながらこれもかざしてあふひ草老せぬ二葉よゝになほ見む

挿頭葵

あかずとや千世かけてみむ神まつる折に葵の今日のかざしは

あふひ草けふ神わざの道へとてゆくもかへるもかざすもろ人

傾心向日葵

桃薬御集第三句「道やとて」に作る、

生ひそめしねざしもあやしうつる日の影に任せてむかふ葵は

月前葵

影やどる露のひかりもあふひ草月のかつらにかけてこそ見れ

葵露

さしそふる光もあれや朝日かげおく露ながらむかふあふひに

山葵

むかしたれたね蒔きそめて神山の今日のみあれに葵とるらむ

あふひぐさいく世かけてか神わざにかざす卯月を松の尾の山

代々かくるその神山のもろかづらいつもみあれを例なるらむ

桃薬御集第四句「いつのみあれを」に作る、

契あれば生ひそめてこそあふひ草山を日影の名になびくらめ

葵懸簾

たまだれのみどりの葵千世かけてかれぬ契のみあれなるらむ
かけわたすみすの葵のをりにあへばおなじ緑の色もめづらし

鶯

むらさめの今夜すぐすな時鳥またも聞くべきをりはありとも
いくゆふべ心づくしのほとゝぎす木の間の月に一こゑもがな

郭公

雲迷ふ空にふり出でゝほとゝぎす五月雨いそぐ聲に鳴くなり
聞きそめし聲なをしみそ時鳥おのがさつきはさこそ待つとも
ほとゝぎすなけやみかげの神わざもやゝとほからぬ杜の梢に
小夜ふかき雲路たどらば時鳥あくるまこゝにやすやひて鳴け
郭公よのあやにくにつれなくば待たでやみまし惜しむ初音を

桃葉御集第一句「小夜ふけて」に作る、

などほとゝぎす
年ごとの初音をいそぐ人にまでなどほとゝぎす猶またるらむ

尋郭公

ほとゝぎす五月まつまのやどりしてすまば生田の杜や尋ねむ
ほとゝぎす世に忍ぶ音ももらすやと片山里にゆきくらしつゝ

桃葉御集第二句「世にしのび音も」に作る、

漸待郭公

ほとゝぎす今より待たばつれなさのさぞな五月も遠き雲居に

桃葉御集第四句「さぞな五月の」に作る、

待郭公

あけはてぬくもぢにもらせ郭公月にきかずばあたらはつねを
郭公としにかはらぬつれなさもわすれてをしむ初音をぞ待つ
待つ人にまけしはつねのつれなさはたはむれにきく時鳥かな

桃葉御集第二句「雲間にもらせ」に作る、

夜待郭公

啼きぬべきこよひも更けてこぬ人のつらさに似たる郭公かな

人傳郭公

時鳥きゝつと聞けば人わきてねたきものからまじるうれしさ

ほとゝぎす啼きつと語る人傳にわがまだ聞かぬ初音をぞきく

人は今朝きゝつとかたる一聲をわが初音なるほとゝぎすかな

初郭公

聞くたびにあかずはありとも時鳥今の初音にまたや似ざらむ

郭公未遍

いつまでもいたり至らぬほとゝぎす待つ里おほきこの比の聲

郭公數聲

つひに世にしのだの杜のもりそめて千枝のかず啼く郭公かな

時鳥こゑのかぎりをこゝにとはたが教へてかをちかへりなく

郭公頻

色かはる涙も知れとほとゝぎす聲のかぎりをつくしてや鳴く

郭公遍

里わかぬ聲は日頃のおこたりを人にことわるほとゝぎすかな

初音こそ人は聞きけれほとゝぎすこの比誰にをしむともなき

聞郭公

ほとゝぎす同じ雲居に名のるをも初音の後ぞさだかには聞く

いつよりも聞きはやすべく時鳥月のあたりを過ぐるひとこゑ

初聞郭公

桃葉御集第二句「聞きはやすべき」に作る、

桃葉御集第五句「初音ともなく」に作る、

有明のつれなからぬも待つ程はほとゝぎす來ぬ初音ともなし
聞きそめてうれしと思ふに時鳥おどろかれぬる今朝の一こゑ

待聞郭公

村雨のはれぬる月に今夜はと待ちしを知るや啼くほとゝぎす

連夜聞郭公

よな〳〵の月にうかるゝ時鳥をしみし音をもわすれてや鳴く

待客聞郭公

待つ人にこゝろをわくるをりだにもなほざりに聞く郭公かは

郭公幽

遠からぬ空にきくともほとゝぎすほのかなるべき老の寢覺を

遠郭公

しのびねはむかへる月のあたりをもよきてやよそになく時鳥

近郭公

月にまた聞く夜をもがなほとゝぎす木高き庭の松に鳴く音を
軒ちかき松に鳴くとやほとゝぎす老が寢覺もさだかにぞ聞く

時鳥何方

桃葉御集第五句「いづこならむ」に作る、

ほとゝぎす思ひもあへぬ一聲はあやしや雲のいづこなりけむ

〔卯月郭公〕

桃葉御集に據て補ふ、

ほとゝぎす五月まつまのいかなれば初音の後ぞ聲をしむらむ

五月郭公

桃葉御集第四句「初音の後も」に作る、

さとつゞき葺けるあやめの軒端をやえも過ぎがてに啼く時鳥

雲間郭公

待たれつるくもまの月の時鳥もらすはつねのそれもさやけき

曉郭公

時しもあれありあけの月に今こむといひしばかりの時鳥かな

桃葉御集第五句「初音なくらむ」に作る、

ほとゝぎすなれも雲居の有明を忍びかねてやひとりなくらむ

つれなさはならふや月のありあけを待ち出でし空になく時鳥

郭公曉過

桃葉御集風「郭公過曉」に作る、

殘る夜をいかに寢よとかほとゝぎすたゞ一聲の夢さましける

曙郭公

身にしむは春と思ひしあけぼのゝ雲も色ますほとゝぎすかな

桃葉御集第二句「ながめにすてぬ」第五句「あかつきの空」に作る、

名殘なほながめてすてぬほとゝぎすたゞ一聲のあけぼのゝ空

夕郭公

今こむとたのめぬからに時鳥待たでは聞きしゆふぐれぞなき

暮郭公

ほとゝぎすさらに待てとや鳴きすてゝ雲よりそゝぐ夕暮の雨

桃葉御集第四句「たどらで過ぐる」に作る、

時鳥くれふかくなる雲路をもたどりて過ぐるこゑやさやけき

山郭公

世に忍ぶおのが初音か山ふかき雲にまじりて鳴くほとゝぎす

音羽山郭公

ほとゝぎすたゞ一聲はあまびこの音羽の山に聞くかひもなし

嶺郭公

五月山いつを待てとてほとゝぎすまだ里とほき峰に鳴くらむ

谷郭公

谷の戸をいでや都にとばかりも誘はれぬべきほとゝぎすかな

樵路郭公

柴人やまづ聞くならしほとゝぎす尋ね入るにもあらぬ山路に

柴人のうたふかへさにこゑ添へて里までおくれ山ほとゝぎす

桃葉御集第一句「柴人も」に作る、

關郭公

ほとゝぎす一聲きゝしやすらひにとまる關路のうさも忘れて

杜郭公

なれきてぞ今はかたらふほとゝぎすしのびしこゑも杜の梢に

聞く人もありと知らずやほとゝぎす忍ぶの杜のけさの初音は

ほとゝぎすあひやどりして啼く聲にあかずやすらふ杜の下道

野郭公

ほとゝぎす鳴きつる雲をあとに見てやまとほざかる野べの曙

行きやらで聞くともあやなうちわたす野邊にはとほき山時鳥

原郭公

鳴きてくる程をや待たむ聲とほき野原がすゑの山ほとゝぎす

浦郭公

ふぢなみはとはでも過ぎし時鳥いつより田子の浦なれて鳴く

海邊郭公

聞きもらす聲もやあらむ涙風のさわぐ磯邊のやまほとゝぎす

こゝろある蜑こそまつが浦島にさらぬ寢覺やとふほとゝぎす

波風のこのゆふなぎを待ちいでゝ鳴くや磯べの山ほとゝぎす

都郭公

四方に見るいづこの山のほとゝぎす出でゝ都の空に啼くらむ

里郭公

朝夕にまつ人おほきほとゝぎすこの里かれずとふこゑもがな

桃葉御集第二句「まつ人しるき」に作る、

市郭公

市人のさのみや待たぬほとゝぎす何にかへてもあかぬ初音を

桃葉御集第一句「市人は」に作る、

さわぎたつ市にはをしめ郭公きゝうることもあらじはつねを

しづまれる夕の市場をりよくて初音聞きうるほとゝぎすかな

社頭郭公

神のますあたりの杜のほとゝぎす所がらにやこゑも木だかき

桃葉御集第二句「心おそさを」に作る、

山家郭公

山にかへる心ぼそさを住む人に今ははつべきほとゝぎすかな

桃葉御集題「舟中郭公」に作る、

船中郭公

かたらへよ棚無小舟ゆくかたもおなじ波路に鳴くほとゝぎす

ほとゝぎすなれもやすらへこゝをせに舟とめて聞くよどの曙

郭公稀

あかでこそとばかり今は鳴くこゑをわすれがたみの郭公かな

つれなさの初音にかへる時鳥またこのごろは待たれてぞ啼く

郭公聲稀

この比は忘るばかりのほとゝぎす今さらなにと聲をしむらむ

郭公漸稀

この比の聲はさながらもろこしの雲埋む山に聞くほとゝぎす

夢中郭公